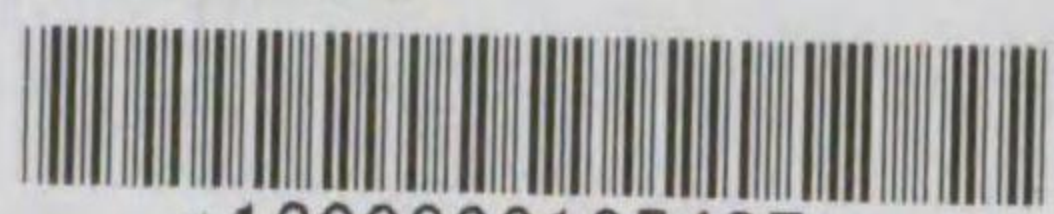


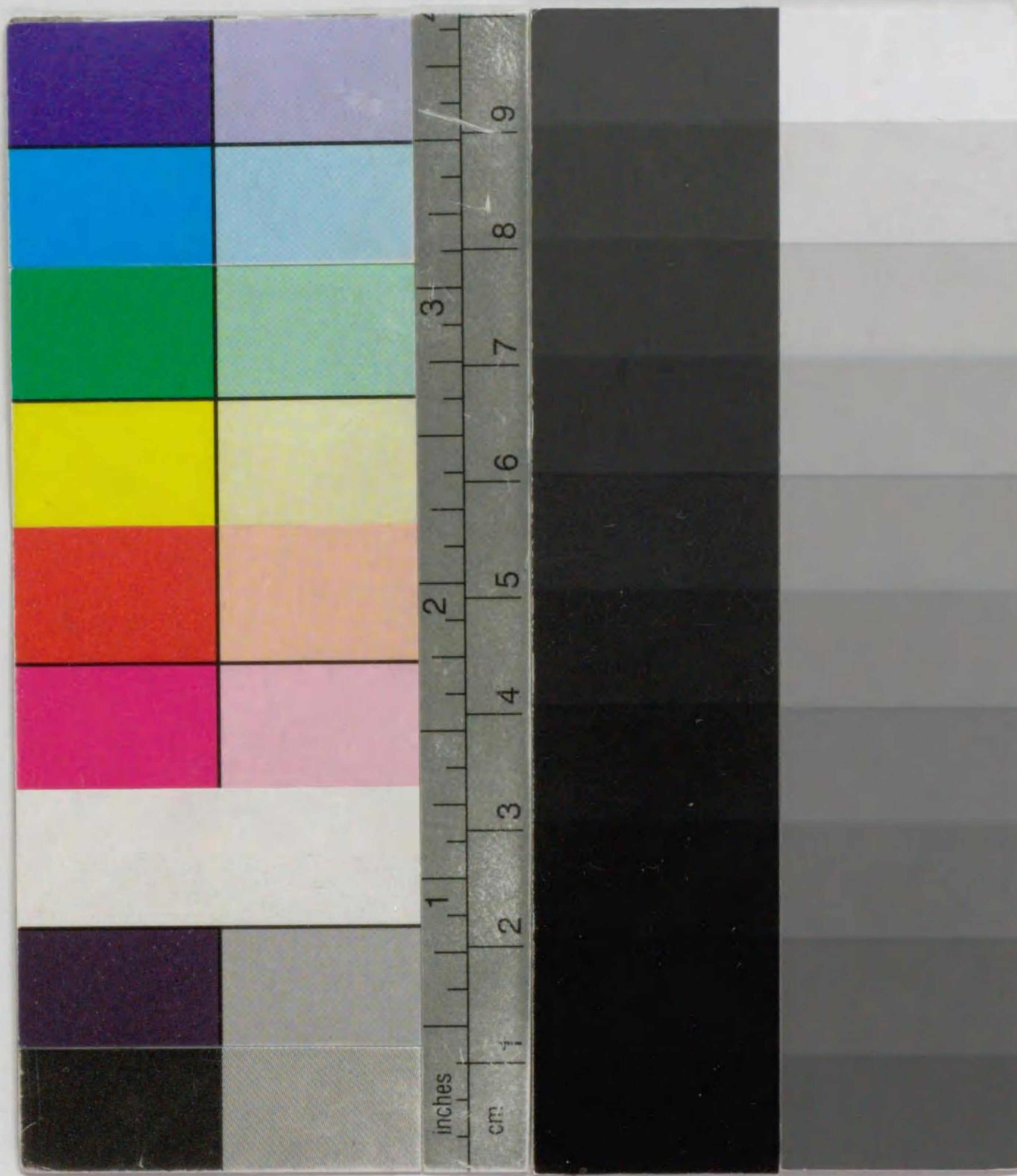
一町田中拾遺集

186
303

186-303



1200800105437



一町田中拾遺集

186-303

附錄

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
門	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓
樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓

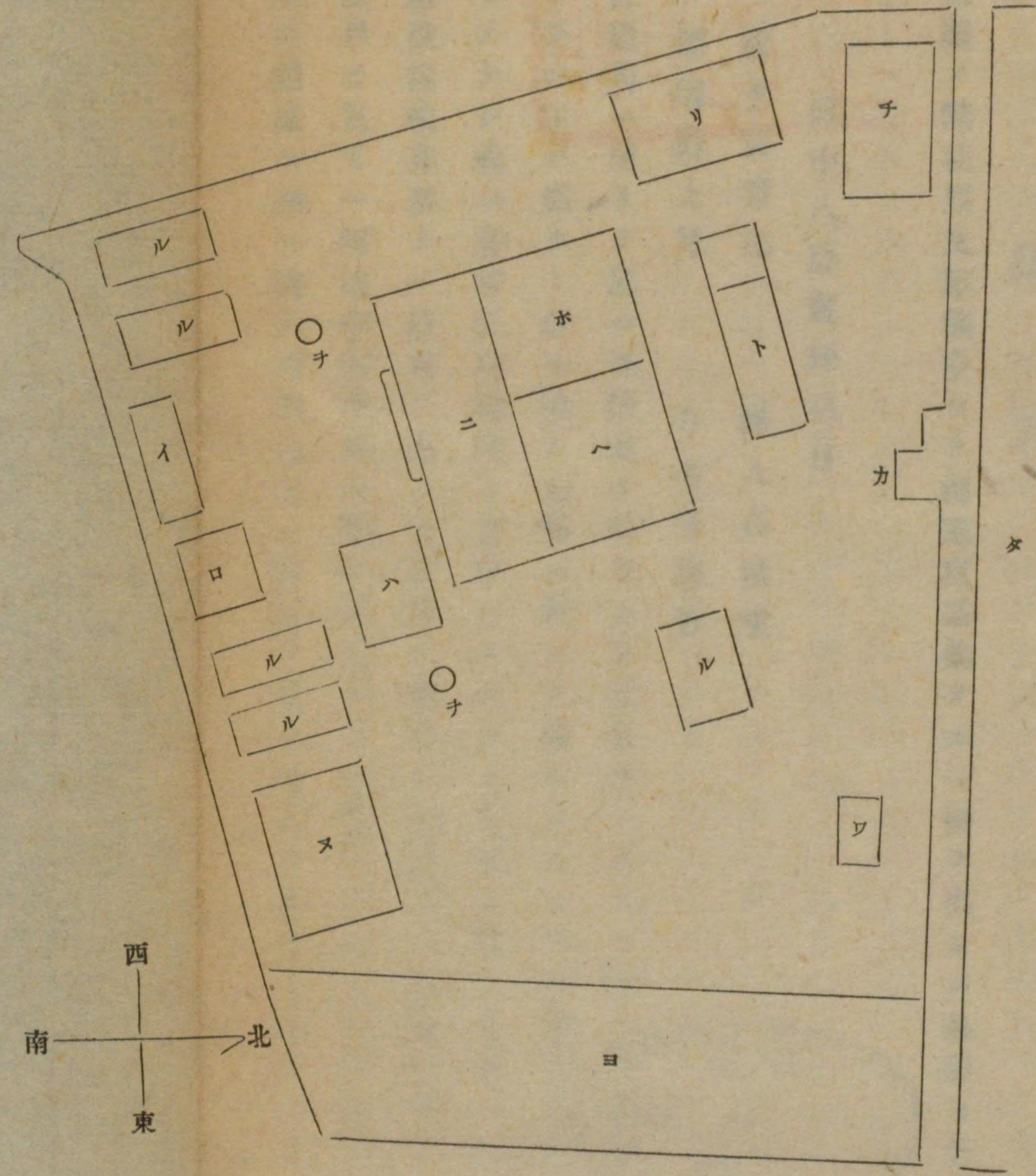
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
門	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓
樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓	樓

附錄

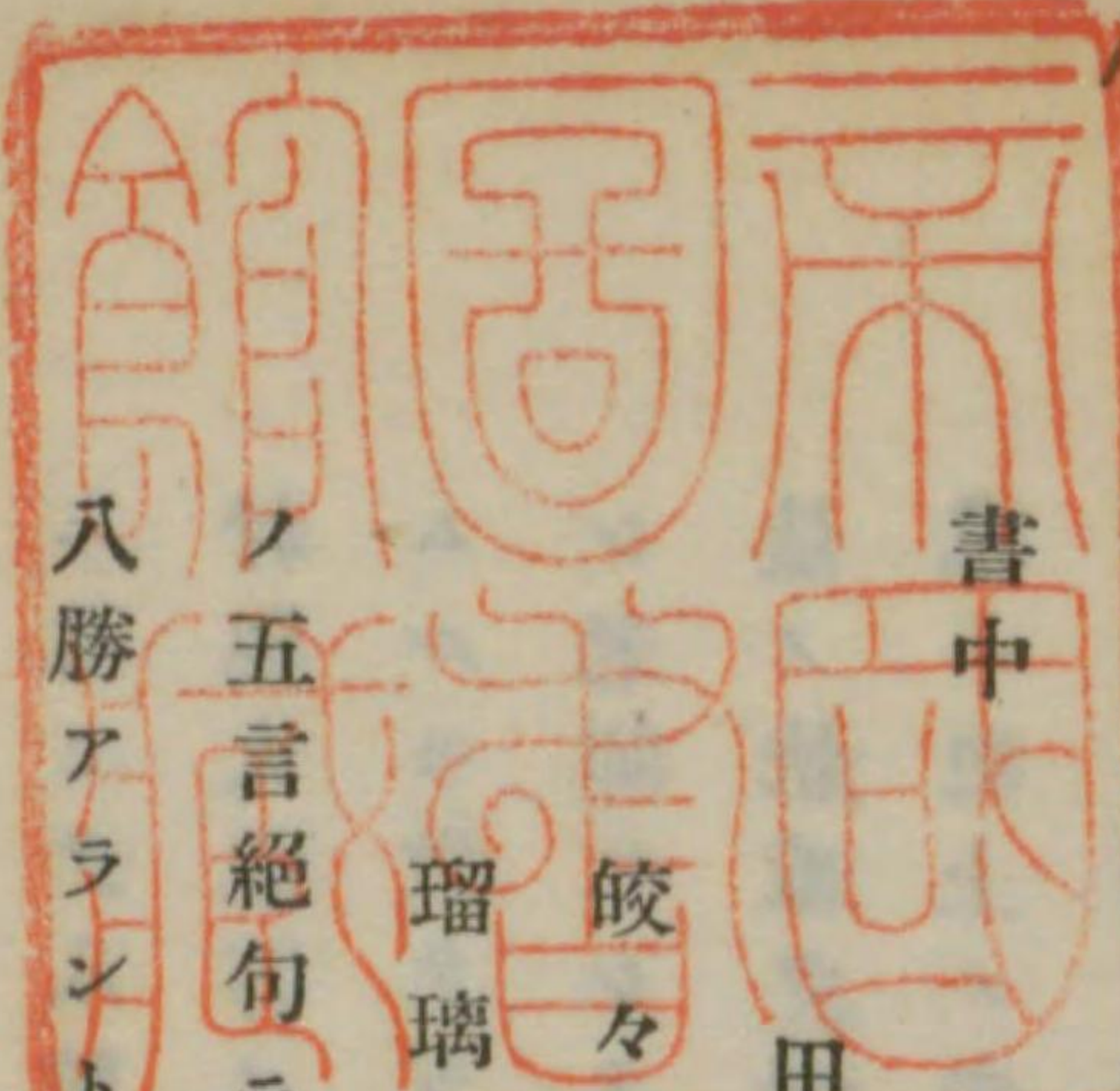
186-303

田安陣屋略圖

ヨ	ワ	ル	リ	ト	ホ	ハ	イ
稻	馬	長	倉	奥	評	腰	門
荷					定	掛	
社	屋	屋	庫	詰	所		
					客		
					間		
タ	カ	ヲ	ヌ	チ	ヘ	ニ	ロ
馬	裏	井	道	窄	白	役	門
					洲	所	
場	門	戸	場	屋	洲	所	番



186-303



書中

晴耕雨讀ノ際萩原文庫篋中ヨリ閑窓夜話集ナル一冊ヲ出シテ塾讀セリ

一町田中拾遺集

緒言

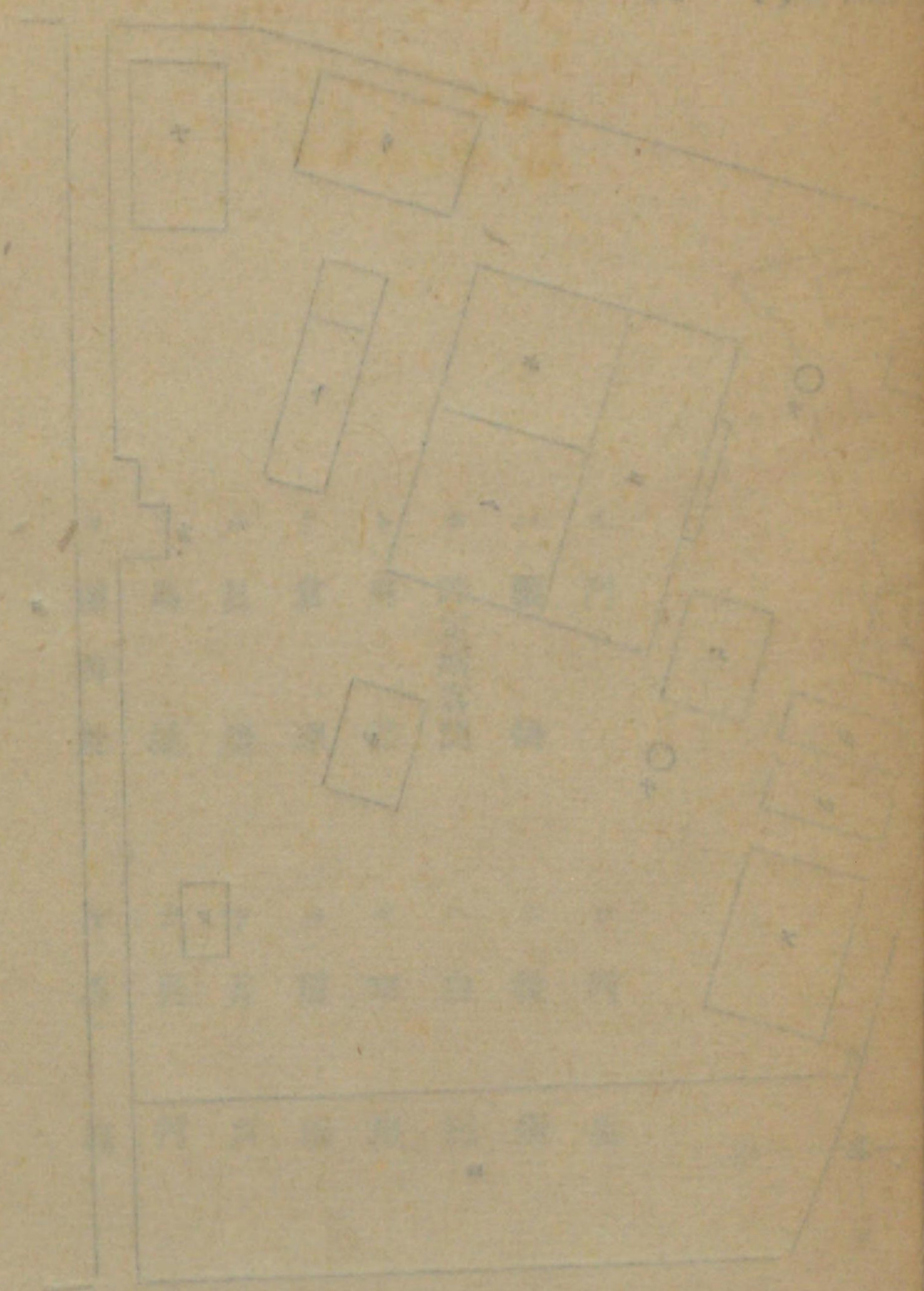
田中八勝寶珠秋月

皎々良宵色 騷人占法堂

瑠璃庭上月 今古有詩香

ノ五言絶句ニ至リテ思ハス快哉ヲ叫ヒタリ古來嘗テ耳ニセサリシ田中八勝アラントハ然リト雖モ他ノ七勝ハ何レヲ指シタルニヤ古書ノ徴ス

ヘキモノナシ或ハ著者天柱禪師ノ自作ニヨルカトモ疑ヒ或ハ本村ハ田安陣屋設置後非常ナル殷盛ヲ極メ大江戸ノ繁昌ニ對比セル俗謠歌田の宿を江戸と見て一町田中御陣屋の前は吉原トサヘ歌ハルニ至リ諸名士ノ來往頻繁ヲ加ヘ彼ノ淺野浪士ノ處分ニ關シ畢世ノ智辨ヲ闘ハシタ



注意

本村々内日記ノ現存セルモノハ省略セルヲ以テ區長ニ就テ知ルヘシ
田安陣屋ニ關スルモノハ之又省略セルヲ以テ本文庫所藏甲斐ニ於ケル
小島蕉園傳ニ就テ見ヨ
本村ノ現在ヲ知ラント欲セハ村役場ニ於テ聞ケ

起源

史蹟ノ徵スヘキモノナク古書傳説ノ稽フルモノナク本村ノ起源ニ至テ
ハ邈トシテ知ルニ由ナシ唯武田氏治政以來漸ク其存在ヲ認メラルヽニ
至ルノミ和名抄ニ巨摩郡下ニ載スル郷名ニシテ山梨郡下ニ屬スヘキト
覺シキモノニアリ即チ
栗原ノ東ニアリ現今ノ等々力村ナリ
栗原六十甲斐國志ニ等力ノ西ニアリ古時ノ官廳ト見エテ氏族ヲ
稱スル者亦少カラス後五十餘村ニ冠ラシテ栗原筋ト唱フ筋ノ中青梨栗
子美ニシテ且多ク出ツ古ヨリ名アリ蓋シ郡郷ノ曠ク及フ所ニシテ換フ
ヘカラサルノ地名ナリト現今ノ日川村ナリ故ニ本村ハ栗原筋ナル名稱
ノ下ニ一括セラレタルナラン而シテ青梨云々トアルヲ以テ見レバ本村
ハ梨子ヲ以テ聞ヘタレハ勿論之ノ内ニ包含セラレタルナラン甲斐國志
中等力栗原二郷ノ名巨摩郡ニ指スヘキ處ナシ山梨ノ東郡於曾能呂ノ間

ニ介シテ二村ノ名アリ巨摩郡堺ヲ去ルコト二里餘ニシテ聯互ノ地ニア
 ラス若クハ和名抄ノ謬リニヤ然レトモ殘簡風土記ニモ亦等力ヲ以テ巨
 摩郡ニ屬シ和名抄ト相合セリ云々甲斐國志白山權現記中神護景雲年間
 ニ勸請云々トアリ逆算スルニ大正九年ヨリ九百七拾餘年ニシテ己ニ之
 ノ時相當ノ部落ヲ形成セルモノタルコトハ明カナレトモ一町田中ト稱
 セシヤ否ヤハ不明ナリ又相興村ノ内北野呂ニ一町田ト稱スル耕地アリ
 古ハ戸數五六十戸ノ一村ナリシカ河流次第ニ南岸ヲ浸蝕スルニ從ヒ現
 時ノ如ク僅カニ十有餘戸ヲ殘スニ至リ同村ノ名ハ日川村ノ田中ニ移レ
 リト云フ又相興村ノ内上矢作一宮村ノ下矢作トハ元連結セル村落ナリ
 シモ是亦河瀬ノ變遷ト共ニ現時ノ如ク十七八町ヲ隔ツルニ至レリ維新
 ノ頃迄上矢作ニアリシ唐土社ガ上記兩村ノ氏神ナリシハ即チ一村落タ
 リシ證左ナリト是等ハ昔時流路ガ現時ノ相興一宮兩村地域ニアリシヲ
 推知スルニ足ルナリ而シテ本村ト東八代田中トハ日川ガ粟原ヲ流シ居
 タル時代ニ同一村落ナリシモ流路今ノ地ニ來リテ南北相隔テラレ遂ニ

郡ヲ異ニスルニ至リタルガ如シ云々

甲斐叢記前輯一ニ田中一町田中ト云村戸南北ニ分レリ南田中ハ今ハ八
 代郡ニ屬セリ桃樹多シ其子最モ甜シ名産ナリ

皇の千年の秋のとし宛よ

田中のさとれををそつ

俊光

日川流路變更ニヨリ一町田中ハ分割セラレ爲メニ日川以南ヲ南田中ト
 唱へ以北ヲ南田中ニ對シテ北田中ト稱セシコトアリシモ一町田中ノ固
 有名稱ハ現代ニ傳ハリシモノナリ

桃ニ就テノ想像傳説

オ伽話中ノ桃太郎ハ田中ナル桃ノ里ニ生レタル偉丈夫ニシテ鬼ヶ島ヲ
 征伐ニ行キタルト云フ鬼ヶ島ハ何レノ地ナルヤ島嶼ナルヤ地名ナルヤ
 判明セザレトモ桃太郎ヲシテ強カラシムル爲メ云ヒタルニハ非ルカ又
 海ヲ越ヘズンバ辛苦ノ度ヲ薄カラシムルノ虞アルニヨリ島トナセシモ

ノナラン日本一ノ黍團子トハ古昔何レノ時代カ未ダ黍ヲ以テ最上主食トナシ一般ハ未タ珍トスルノ時ニ於テ特ニ桃太郎ノ人格ヲ高ムル手段トシテ日本一ト稱セシカ情ニ附キ來ル犬ト猿アリ猿ハ猿橋ノ土匪雉ハ鳥澤ノ住民犬ハ大目ニ住メル住民等悉ク桃太郎ノ勇ト仁トニ喜隨セシモノナリト牽強附會ノ說ナリト雖モ幼童オ伽話トシテ佳作ト云フベシ甲斐國志二卷四ニ

一町田中 高五百八十石五斗二升

戸七十二

口四百五十六

男二百二十六
女二百三十六

馬一

東ハ歌田北ハ大野ニ界シ南ハ三日河ヲ限リ大石和筋南田中ナリ古時同村ナリシヤ否ヤ本村或ハ北田中トモ唱ヘシト云今田安殿ノ地所アリ按スルニ本村ハ古ヘ西北ニ向テ發展セシ形蹟アリ南ハ日川ニ遮ラレ東ハ日川氾濫ノ爲メ砂礫ニヨリ耕作ニ適セズ西ハ甲府城下ニ通ズルノ便ト水害ノ憂ナキトニヨリ主トシテ西方ニ住居多カリシガ如シ維新後甲州

街道ノ改造及築堤等ニヨリ交通頻繁トナレル東南ニ發展シ明治四十年水害後新ニ家屋ヲ構フルモノハ汽車交通ノ便ト水害ヲ恐ルヽトニヨリ日川街道ニ沿ヒ乃チ北方ニ向テ發展ノ頃向ヲ來セリ

發達ノ年譜

神武天皇御即位紀元々々年ヨリ神護景雲白山神社勸請マデ

約千六百年

白山神社勸請ヨリ天正元年稱名庵ノ設設マデ

約六百二十一年

稱名庵架設ヨリ天正十年武田氏滅亡水晶珠數ヲ庵ニ投ケ入レシマデ

十年

天正十年ヨリ慶長五年領主關金平本村ニ住居セルマデ

二十五年

慶長五年ヨリ元和元年關金平大坂出陣戰死マデ

十四年

元和元年ヨリ寛永元年(寛永年間白山神社御神体ヲ盜マル)マデ

九年

寛永元年ヨリ寛文六年稱名院現地ニ移リシマデ

四十三年

寛文六年ヨリ寶永七年水上稻荷ヲ勸請セシマデ

四十六年

寶永七年ヨリ寛保二年稱名院現過去帳ノ始メマデ

三十四年

寛保二年ヨリ延享三年田安陣屋ノ創立マデ

五年

延享三年ヨリ安永元年磯野原泉甲斐徳本抄書ヲ著セシマデ

二十七年

安永元年ヨリ文化二年本村國學者萩原元克氏死亡又後年生祠ニ祭ラレ

タル名代官小島蕉園氏本村陣屋ニ就職セシマデ

三十四年

文化二年ヨリ文化九年本村講中ニヨリ石尊山及秋葉山ヲ勸請セルマデ
八年

文化九年ヨリ文久二年名代官磯部寛五郎氏本村陣屋ニ就職セルマデ

四十九年

文久二年ヨリ明治三年五月陣屋ヲ廢セラレ甲府縣ニ合併セラレシマデ
九年

文久二年二月和宮内親王將軍家ニ御降嫁ノ御事アリテ各所へ御用仰出
サレ本村名主小野次良左衛門氏ハ村内ヨリ人足トシテ品行端正ニシテ
屈強ノ青年ヲ選抜シテ引卒東上セリト云フ

天正十年武田勝頼戰死後甲斐國ハ徳川氏支配ニ屬シ國守城代ヲ置キテ
政事ヲ司ルコト百六十九年延享三年ニ至リ御本領ト稱シ徳川幕府ノ直
轄トナリ代官所ヲ設置セリ爾來百二十三年ニシテ陣屋ヲ廢シ維新政事

トナレリ此間寛政年間ニ太榊事件アリ寛政五年七月仕置場ニ於テ獄門ニ處セラレシ者二名本村郷宿澤右衛門氏又過料ニ處セラレ稱名院又集會所トナリシヲ以テ叱責セラレタリ天保七年八月郡内騒動ニ際シテハ本村大黒屋伊代吉ノ家ヲ焼拂ヘリ云々ト

明治元年六月鎮撫府ヲ置キ

同八月鎮撫府ヲ廢シ甲斐府トナリ

二年七月甲斐府ヲ改メ甲府縣トシ

三年五月田安領ハ甲府縣ニ合セラレ

四年十一月甲府縣ヲ山梨縣ト改

五年一月四郡ヲ分チテ八十區トナシ本村ハ山梨郡十七區中ノ十三區ニ屬セリ

初鹿野市右衛門氏區長トナレリ

十一月小野七郎右衛門氏戶長トナリ明治八年八月退職セリ

八年六月本村ハ日川村ニ合併ス

九年十一月更ニ區域ヲ改正シ本村ハ二十五區ニ所屬セリ

十一年十二月四郡ヲ九郡ニ分割シテ現在ニ至ル

十五年秋日川村合併及日川橋開通大祭ヲ行フ

二十六年神社佛閣合併ヲ行フ

十三年六月初鹿野市右衛門氏縣會議員トナル

二十二年七月全氏日川村戶長トナリ二十三年五月退職ス

二十三年三月小野元兵衛氏縣會議員トナル

二十七年十一月及二十八年十月全氏再ビ縣會議員トナル

三十一年十二月全氏日川村々長トナル三十三年十二月退職

四十四年九月小野義太郎氏郡會議員トナル

大正元年九月全氏日川村々長トナリ五年九月退職ス

大正四年ヨリ電燈點火ス

行 啓

明治十三年 六月十九日明治天皇陛下本縣ニ御行啓アラセラレ午後一時本村ヲ御通過アラセラレタリ

明治四十五年 今上天皇陛下東宮ニテ在シマセシ時四月二日特ニ山梨縣立日川中學校ニ御行啓アラセラレタリ當日殿下ニハ日下部停車場ヨリ腕車ニ召サセラレ日川街道ヲ經九時十分中學校へ御着アラセラル我日川村青年會員ハ全部竹箒ヲ携へテ輦道ヲ清メタリ甲州街道ハ明治四十年水害後砂礫累々トシテ完全ノ道路ヲナサス殿下ノ行啓ニ際シ誠ニ恐懼ニ絶ヘサルノ折三井清ノ眞土寄附ニヨリ全邸宅内ヨリ日川村青年全部出勤ノ下ニ道路ニ運搬シ地均シ撒水等徹夜奔走行啓數時間前ニ竣工奉迎スルヲ得タルハ幸ヒナリキ

當日特ニ永遠ニ紀念スヘキハ各支部青年員道路ニ奉迎ノ際畏クモ殿下ハ各青年會旗ニ舉手ノ禮ヲ賜ハリタル是ナリ何ノ幸榮カ之ニ加カサランヤ空前ニシテ又絶後ノ譽ナリト謂ツヘシ感極リテ泣ケリ之ニ殿下ノ舉手ノ禮ヲ賜ハリタル理由ヲ追想セバ我青年會ハ之ノ光榮アル會旗ヲ

永遠ニ保存シ之ノ會旗ノ下ニ奮勵努力以テ聖代ノ民タランコトヲ期セ
スンハアラス之實ニ本村唯一ノ重寶ト云フヘシ因ニ本青年會ニ於テハ
支部長糠信良平支部旗ヲ支持奉迎セリ
又本村八十歳以上ノ高齢者ヨリ各村ニ括ノ上奉獻物ヲ爲セリ
一町田中ニ於ケル高齢者ハ

磯野丑太郎氏母

飯島利太郎氏母

早川清吉氏母

以上三氏ナリ

山梨縣醫師會ニ於テハ救護班ヲ設置シ本村ニ於テハ醫師三井清宅ヲ之ニ宛テ看護婦休息村出身久保川チエノ一宮村出身雨宮テル二名ヲ派遣セリ

尙本組四ツ角及中學校入口道路ニ國旗ヲ掲グ本村名譽職ヲ始メ小學校職員兒童軍人團外老幼男女本村重川橋ヨリ中學校ニ到ル間立錐ノ餘地

ナク奉迎奉送セリ

御即位大禮

大正四年十一月十日 今上天皇陛下御即位式ニ際シ養老賑恤ノ儀ニ付
本村在住者ニシテ天杯拜受者ハ

九十歳以上 磯野丑太郎氏 母さの

八十歳以上 飯島利太郎氏 母いの

田草川欽一氏 祖母のふ

以上三氏

賜饌者ハ

正八位 小野元兵衛氏

支勳八等 小野義太郎氏

以上二氏

御大禮紀念事業トシテ當支部ニ於テハ圖書部ヲ新設シ萩原文庫ト命名

セリ之レ本村國學者故萩原元克先生ノ徳ヲ布衍センカ爲ナリ然ルニ本
村有志者ヨリ多數ノ寄附ニヨリ目下數百部ヲ藏シ會員以外ノ者タリト
モ希望ニヨリ閲覽セシムルコトヲ爲セリ

教 育

弘化以前頃ヨリ寶珠庵ニ假寓セシ僧天柱氏村内子女ニ漢籍坤花及點茶
ヲ教授セリト云明治七年ヨリ日川小學校ニ於テ兒童ノ教育ヲ爲スニ至
レリ

明治十八年稱名院ニ於テ聯合体操講習會アリタリ

明治四十年九月ヨリ四十二年四月マテ稱名院ニテ尋常一二年ノ一町田

中兒童ノ分教場ヲ置ケリ之レ水害ニヨリ校舍流失セシニヨル

山梨縣立日川中學校 明治三十四年十一月起工三十五年十月竣工

明治三十五年十一月移轉 生徒六百名ヲ收容ス

本村人ニ係ル圖書ノ著者

天明元年 山梨岡の文 一章 萩原元克著
 天明六年 甲斐名勝志 五卷 萩原元克著
 寛政元年 石森孝女傳 一卷 萩原元克著
 寛政十一年 道の枝折 三卷 萩原元克著
 享和元年 正誤秋の寐覺 一卷 萩原元克著
 未刊 道の論 一卷 萩原元克著
 萩原元克諱ハ士讓萩廼舎ト稱シ後平吾ト云ヘリ本村字梨之木北ノ割千二百〇七番地ニ生ル父ヲ元翼ト云フ初メ加賀美光章ニ學ヒ後本居宣長ノ門ニ入ル國學ニ通シ和歌ヲ能クス文化二年七月九日年五十七ニシテ卒ス一宮村本都塚淨泉寺ニ葬ル
 安永元年 甲斐徳本抄書 一卷 磯部原泉著
 磯部原泉ハ本村醫師ニシテ文化十四年四月二十五日卒ス稱名院ニ葬ル
 普照院濟譽大光鶴翁居士ト稱ス 壽七十六
 萬延元年 間窓夜話集 一卷 初鹿野操藏版

天柱禪師著トアレトモ悉ク初鹿野氏ノ手ニ成レルモノナリ萬延二年六十四歳ニシテ卒ス稱名院ニ葬ル
 珠玉院寶譽見光樹山居士ト稱ス
 明治四十一年 小野式魯桑栽培法 一卷 小野元兵衛著
 風穴秋蠶飼育法 一卷 小野元兵衛著
 大正八年六月十九日卒ス本村共葬墓地ニ葬ル
 至徳院天譽眞實富要温知居士ト稱ス 壽六十三
 六月十八日綠綬褒章ヲ授與セララル

青年會

日川小學校設置以來夜學ナルモノ、始マリヲ以テ起リ其名稱及組織ニ變化アリタリト雖モ内容ハ殆ント同一經路ヲ辿リ現在ノ域ニ達シタルモノナリ大正二年學事獎勵規定ニヨリ表彰セラレタリ

萩原文庫

大正四年御大禮奉祝紀念トシテ圖書館ヲ新設シ萩原文庫ト命名シ目下
稱名院内ニ設置ス

展覽會

明治十九年稱名院ニ於テ繭糸其他農事展覽會アリタリ

兵事

明治二十七八年日清戰役ニ於ケル殊勳者

從六位勳六等功五級陸軍砲兵少佐

根津 一氏

同出征軍人

(順序不同)

佐藤 恒吉氏

糠信 俊三氏

飯島 宗三郎氏

石黒 儀十郎氏

河野 峰太郎氏

磯野 秀之助氏

明治三十三年北清事變

海軍 二等筆記

早川 潔氏

明治三十七八年日露戰役

(順序不同)

海軍 一等筆記

早川 潔氏

磯野 秀之助氏

西島 六郎氏

柏手 新太郎氏

佐藤 恒吉氏

糠信 俊三氏

西島 邦三氏

磯野 波藏氏

磯野 米二郎氏

田草川 幸太郎氏

小野 健吉氏
田草川 長造氏

開戦後直ニ本村ニ於テハ獎兵義會ヲ組織シ本村内一般ヨリ會費ヲ徴收シ兵士ノ送迎慰問農事幫助等ノ事務ヲ司リタリ

在郷軍人會

明治四十三年設立現在ニ至ル

衛生組合

明治四十年設立現在ニ至ル

郵便電信局

明治十七年五月一町田中郵便局トシテ開始セラレ小野元兵衛氏局長トシテ全氏自宅ノ一部ヲ用ヒタリ
明治十八年十月貯金開始セラル

明治二十三年二月小野元兵衛氏父孝思氏局長トナル

明治二十四年十二月爲換事務開始セラル

明治二十七年一月小包郵便開始セラル

明治三十四年七月再ビ小野元兵衛氏局長トナル

明治三十五年三月電信取扱ヲ始ム

明治四十五年五月日川郵便電信局ト改稱ス

大正八年三月小野義太郎氏局長トナル

銀行

株式會社興商銀行 明治十一年十二月興商社ナル名目ノ下ニ胚胎シ株式五萬圓ヲ以テ組織セラレ明治二十七年現今ノ名目ニ改稱シ明治三十三年拾五萬圓ニ増資大正九年六月更ニ五拾萬圓ニ増資セリ

日川街道

以前ハ本村ヨリ大野二本五輪ニ出テ下神内川ニ入り青梅街道ニ通セリ
明治三十三年一月縣道ニ編入セラレタリ
明治三十六年六月中央東線ノ甲府マデ開通スルニ及ヒ日川街道ハ特ニ
面目ヲ改タリ

水 害

明治四十年八月二十四日大洪水ニヨリ當時竈數百二十六現存セルモノ
後ニ八十五ヲ殘シ他ニ移住セルニ至レリ實ニ戸數ニ於テ七十戸餘ノ流
失ナリキ其他流失ノ厄ヲ免レシモ村内悉ク浸水シ爲ニ用水及食物ノ欠
乏ヲ來シ困憊ノ極ニ達セルノ際漸ク交通開キ蘇生ノ思ヲナセリ記事詳
細ハ山梨縣水害史ニ詳ナルヲ以テ省略ス
兩陛下ハ日野西待從ヲ差遣アラセラレ親シク水害ノ狀況ヲ視察セラレ
タリ

内務大臣原敬氏又水害視察トシテ來峽

東京新聞十四社員又來峽悉ク本村ヲ通過セリ

陛下 救恤ノ御思召ヲ以テ本縣ニ金五千圓ヲ下賜セラル我一町田中又
各戸金五拾錢宛拜受セリ

交通杜絶ノ爲メ米麥欠乏河水濁流ノ爲メ用ヲナサス井水又混濁蔬菜亦
流失茄子一個サヘ之ヲ求ムル能ハス衣服ハ着用ノ儘ニシテ洗濯スルヲ
得ス月餘ニ亘ルモ入浴スル能ハサリキ耕ス能ハス移住スル能ハス全ク
途方ニ暮レタルノ際四方ノ救恤ト陛下ノ救恤金トニヨリ鼓舞奮起スル
ニ至リ談合ノ上五拾錢ヲシテ至尊ノ御仁惠ニ答ヘ奉ラントスルノ意志
ヲ以テ悉ク興商銀行ニ貯金シ粉骨勉勵昔日ノ日川村ニ恢復セント一決
セリ

當時本村ニ於ケル人家左ノ如シ

甲州街道歌田尻ヨリ四ツ角ニ至ル間ニ於テ南側

- 一 △小野 治甫
- 二 △雨宮 伊十郎
- 三 △鹽島 仁三郎
- 四 △野澤 佳平
- 五 △雨宮 喜甫
- 六 △梶市 兵衛

- 七 △柏手繁太郎
- 八 △佐野庄造
- 九 △水上廣造
- 一〇 △佐藤源作
- 一一 △奧野忠次郎
- 一二 △大久保作十郎
- 一三 △嵐安之助
- 一四 △原田與三郎
- 一五 △飯島常吉
- 一六 △梅本彖次郎
- 一七 △秋山萬助
- 一八 △山村清之助
- 一九 △三枝榮太郎
- 二〇 △柏手次助
- 二一 △佐野實三
- 二二 △小野元兵衛貸家
- 二三 小野元兵衛

全 北側

- 二四 △鳥居廣吉
- 二五 △根津嘉一郎
- 二六 △田中熊太郎
- 二七 △初鹿野幸助
- 二八 △齊藤書店
- 二九 △近藤金作
- 三〇 △千本清次郎
- 三一 △雨宮信策
- 三二 △古田巖男
- 三三 △小林午吉
- 三四 △降矢時計店
- 三五 △原 ゆか
- 三六 飯島平右衛門
- 三七 赤澤市平
- 三八 高野由太郎
- 三九 高木元右衛門
- 四〇 山本德二郎
- 四一 秋山菊二郎
- 四二 小澤謹四郎
- 四三 三井清
- 四四 小野義太郎

四ツ角ヨリ南甲州街道ニ於テ東側

- 四五 早川瀨兵衛
- 四六 小野元兵衛隱宅
- 四七 △田草川竹三郎 隱居
- 四八 △田村竹作
- 四九 △小林倉吉
- 五〇 △西島六郎
- 五一 △初鹿野房太郎
- 五二 △小高フサ
- 五三 △小高宗兵衛
- 五四 △志村輝之佐
- 五五 △内田豊吉
- 五六 △三枝彖吉
- 五七 △三枝茂吉

全 西側

- 五八 初鹿野延次郎
- 五九 若杉又四郎
- 六〇 小野三吉
- 六一 △田草川竹三郎
- 六二 △手塚甚之助
- 六三 △河野熊太郎
- 六四 △初鹿野秋之助
- 六五 △飯島元甫
- 六六 △田草川豊兵衛
- 六七 △小高實太郎
- 六八 △高橋せき
- 六九 △高野好太郎
- 七〇 △原貞次郎
- 七一 △向山大吉
- 七二 △田草川猪三郎
- 七三 △赤澤安吉
- 七四 △市川重助
- 七五 △飯島きわ

全裏町天神社通リ

亥 △萩原升太郎 七 △窪島ヨシ 六 △古屋清助

九 △渡邊龜十郎 八 △河野周太郎

全西側白山社通り

八 △佐藤貫一 七 △岩間縫三 六 △糠信俊三

五 △飯島伊甫 四 △古屋喜一 三 △糠信高造

七 △石黒義十郎

四ッ角ヨリ西小松街道南側

六 田村亀吉 五 柏手信一 四 河野峰助

九 保坂茂十郎 八 早川利兵衛 七 古屋榮助

四 初鹿野静太郎 五 藤田兼吉

全北側

稱名院境内 興商銀行 六 飯島利太郎

九 萩原彦三郎 八 飯島米太郎 七 田草川玄ん

一〇〇 田草川健二郎

四ッ角ヨリ北日川街道東側及裏通り

一〇一 小野留吉 一〇二 飯島清吉 一〇三 田村洞平

一〇四 飯島隆造 一〇五 松澤侶治 一〇六 佐藤伍作

全一〇七 大木熊太郎

全西側

一〇八 田村久兵衛 一〇九 稱名院 一一〇 磯野奎之助

一一一 磯野秀之助

御陣屋前

一一二 佐藤政太郎 一一三 藤卷藤平 一一四 飯島仁造

一一五 飯島良造 一一六 磯野重左衛門 一一七 日野原茂兵衛

一一八 久保田久吉 一一九 田草川房太郎 一二〇 磯野丑太郎

一二一 飯島勝太郎 一二二 石黒萬吉 一二三 中村東吉

一二四 岩間峰太郎 一二五 藤卷茂七 一二六 向山庸造

明治四十三年八月水害 上栗原堤防破壊セルモ本村ニハ幸ヒ重川沿耕地ノ流失セルノミナリキ

大正三年八月三十日午前二時水害 下栗原お旅所堤防破壊シ本村ハ過半浸水セリ其災害左ノ如シ

流失家屋 飯島清造 久保嶋牧三郎 岩間縫三

半潰家屋 鈴木豊作 初鹿野延次郎 三枝榮太郎

三枝茂吉 萩原升太郎 古屋永助

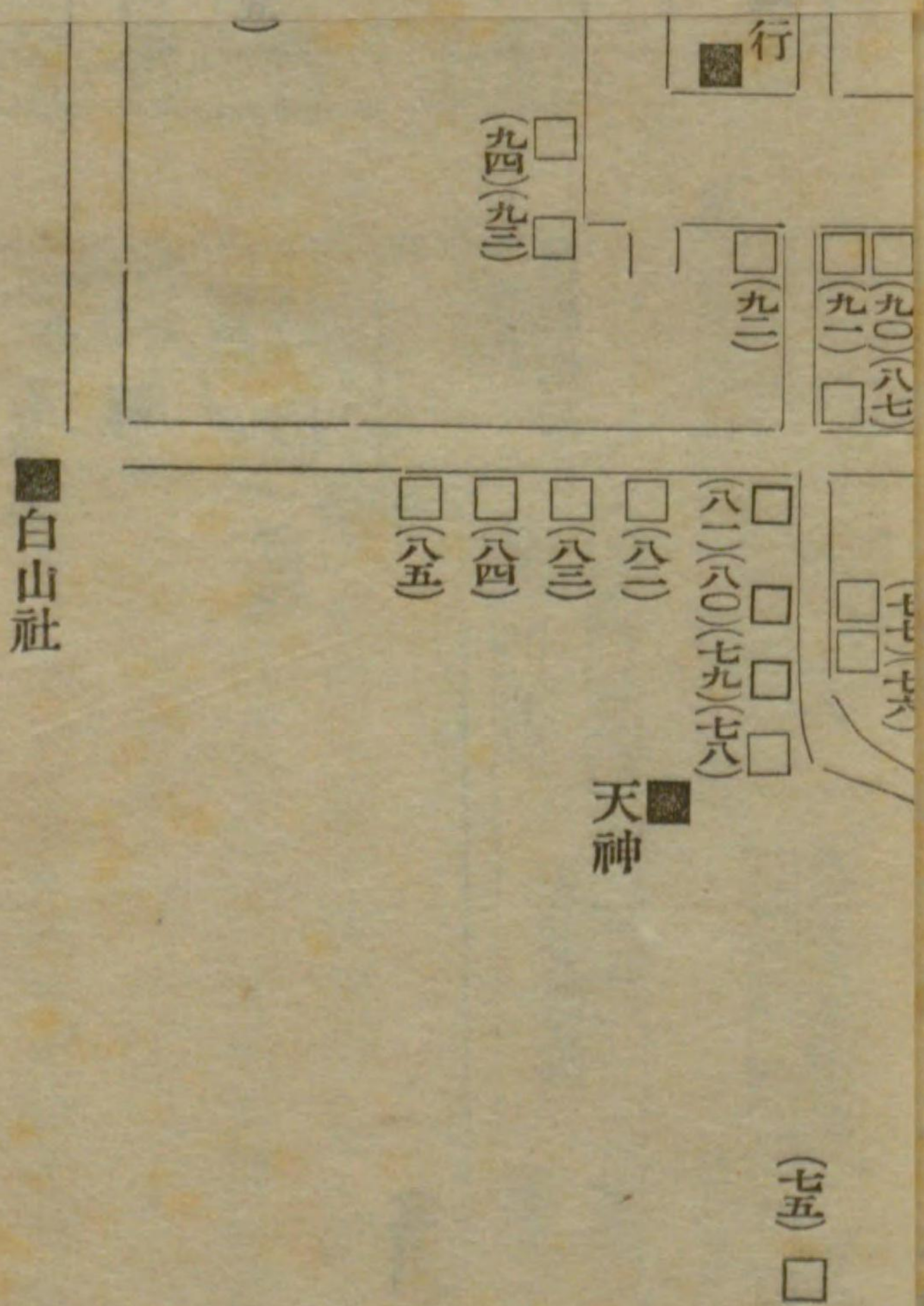
初鹿野静太郎

床上浸水 二十二戸餘

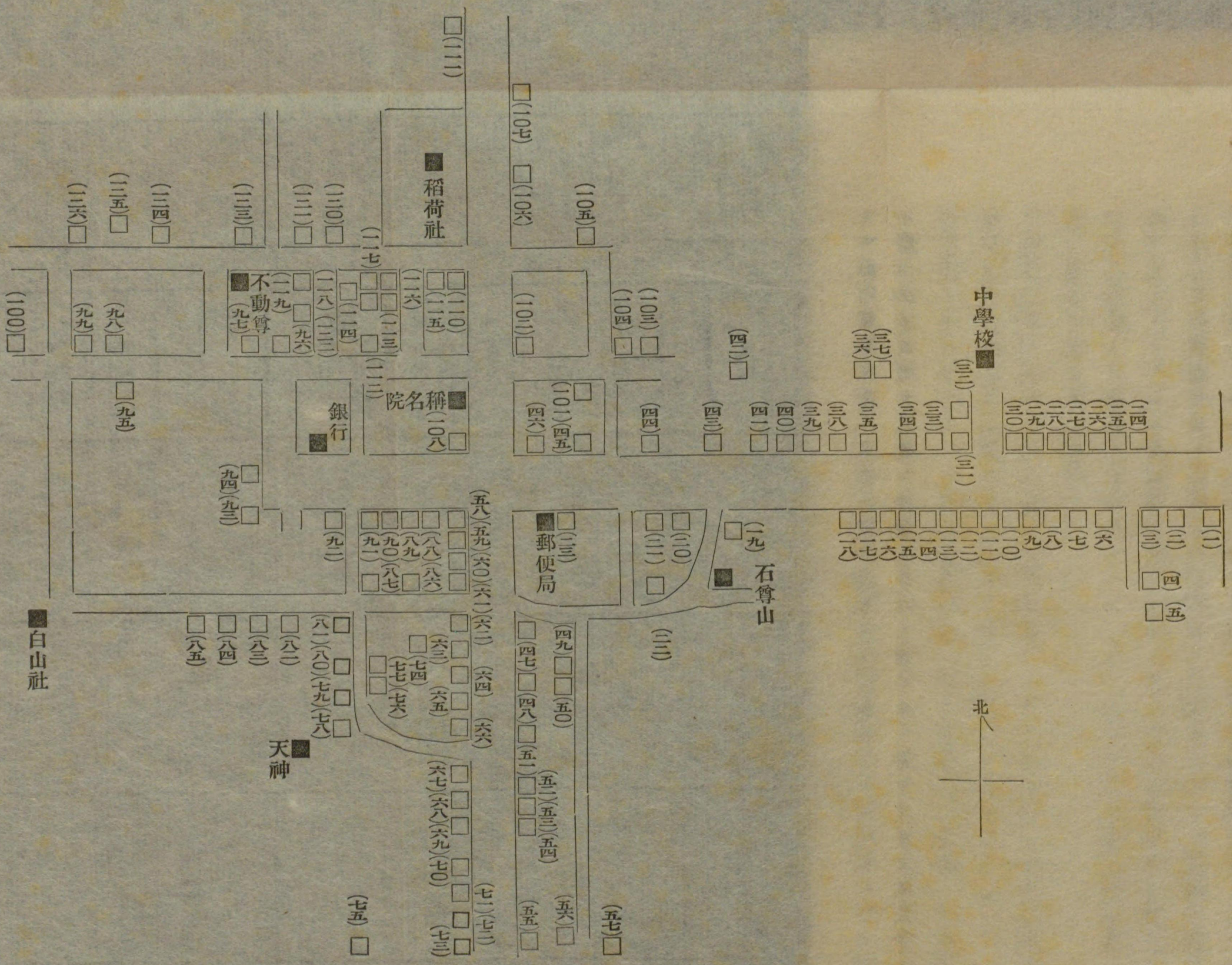
床下浸水 五十二戸餘

全ク浸水セサリシハ數戸ノミ

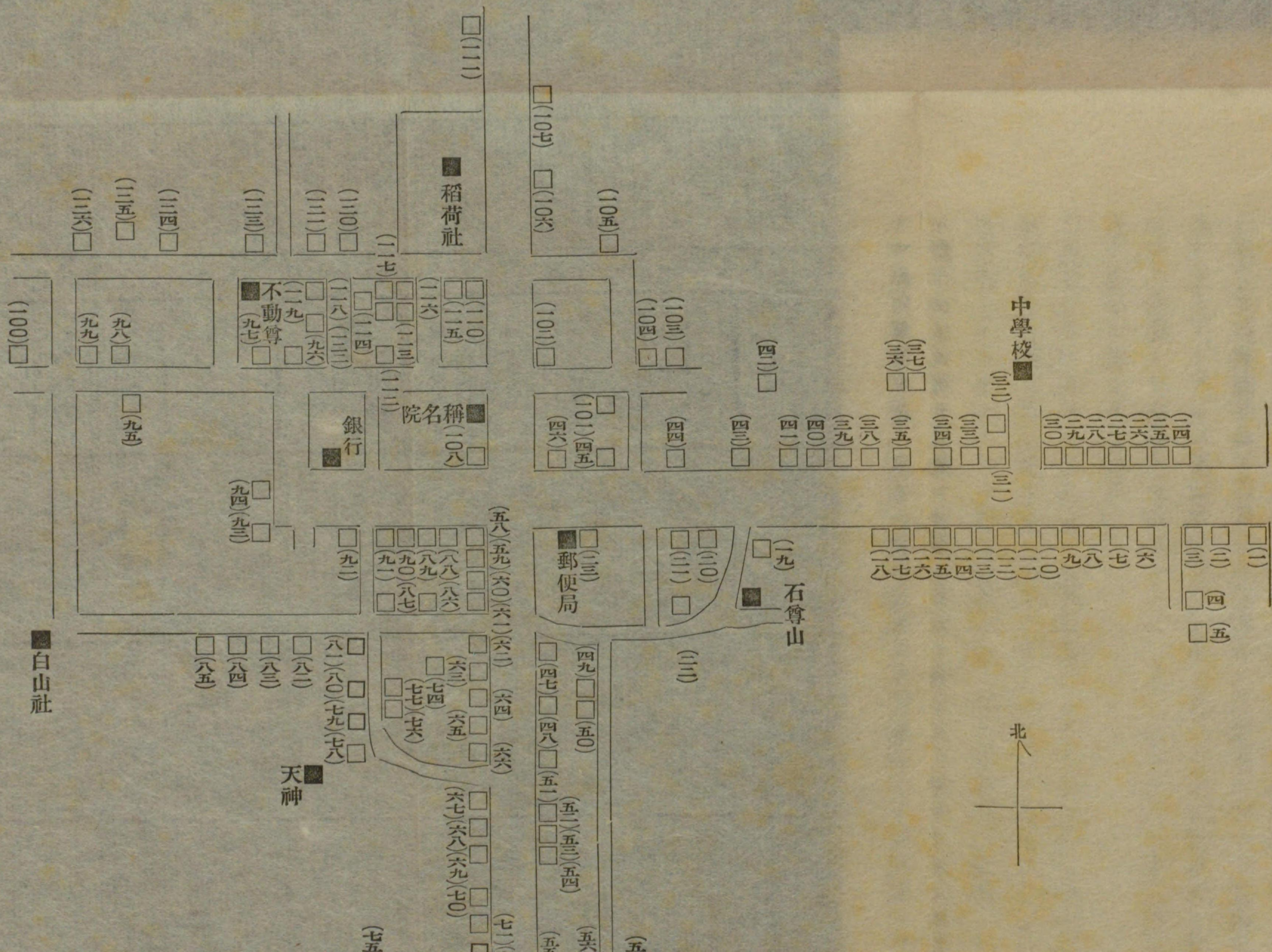
傳説 古來ヨリ屢水害ノ厄ヲ被ルニ必ス下栗原分お旅所ト稱スル部ヨリ日川河水ノ浸入ニヨラサルハナシト云ヘリ以上三回ノ大水害ニ於テ明治四十年ニ於ケル被害ヲ最モ大ナリトス然シテ四十年及ビ古昔ノ水



明治四十年ニ於ケル被害ヲ最モ大ナリトス然シテ四十年及ビ古昔ノ水

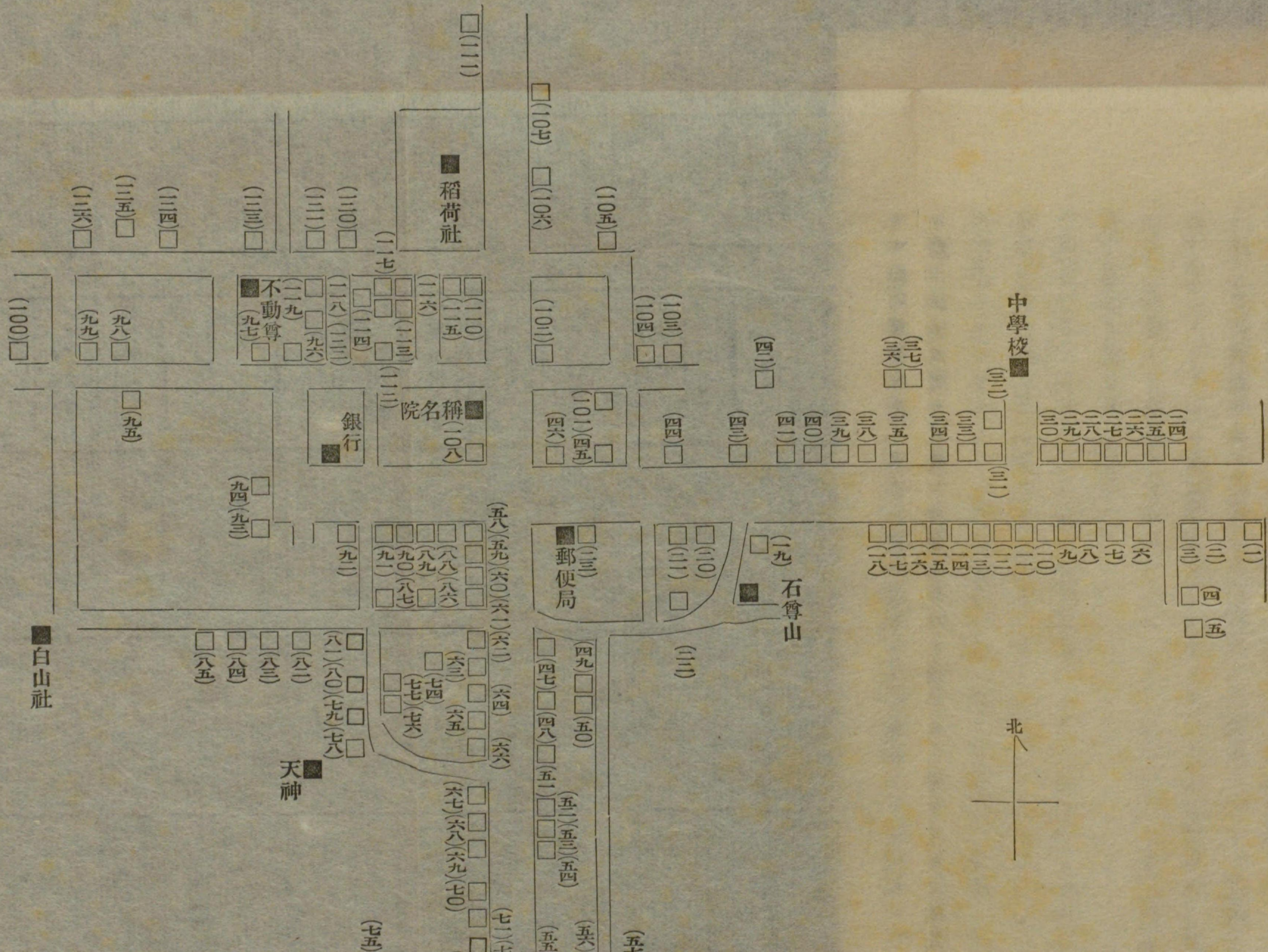


明治十四年八月水害當時家人略圖



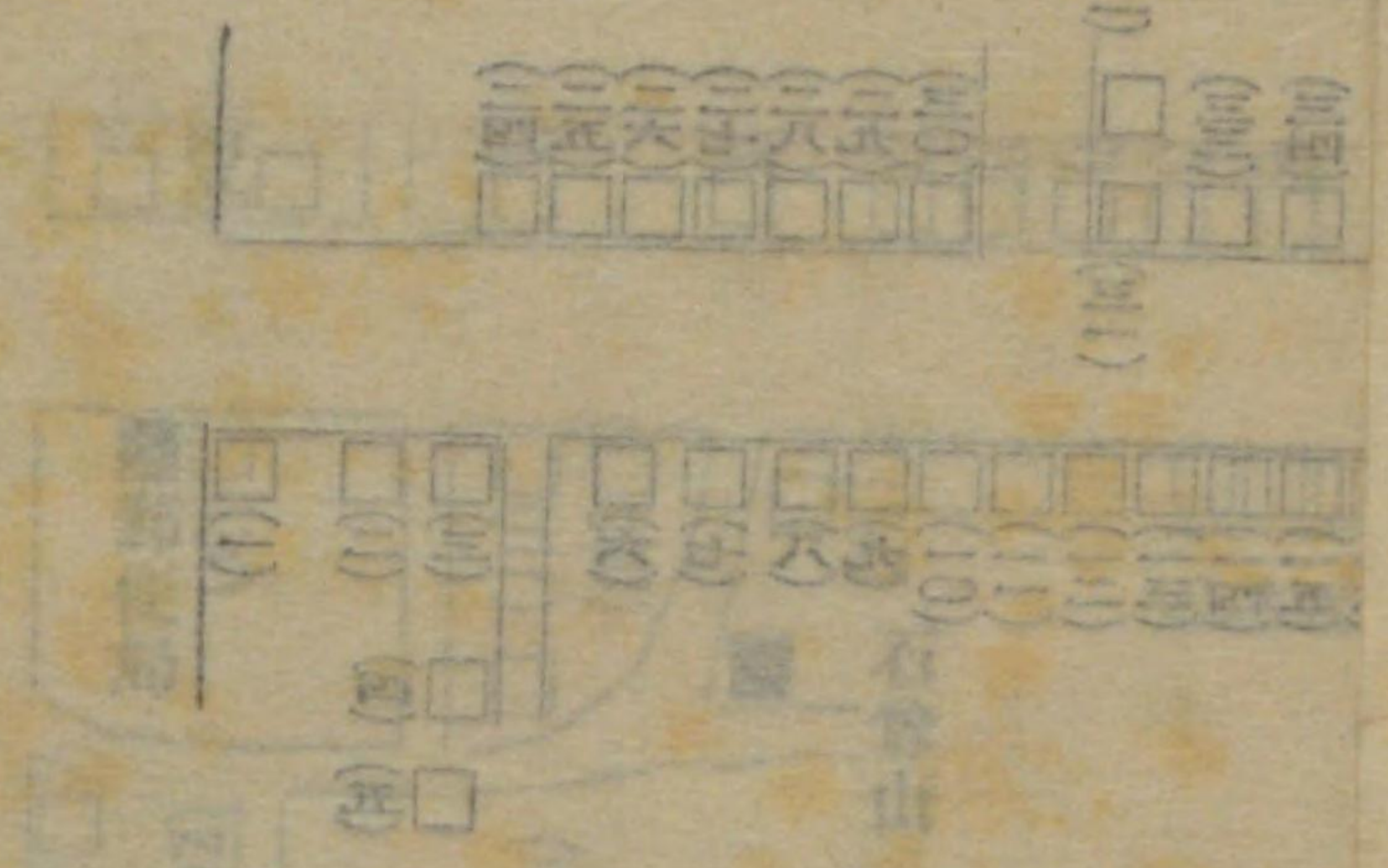
明治四十年ニ於ケル被害ヲ最モ大ナリトス然シテ四十年及ビ...

明治十四年八月水害當時家人略圖



水害 上野原堤防破損セルル本村ハ幸ヒ雷川沿橋

中學對面



明治四十年ニ於ケル水害ノ被害者ノ數モ大ナリトシテ然ラバ四十年及ビ古昔ノ水

害ニヨル流失區域ヲ檢スルニ毎回同一流路ヲ取ルカ如シ乃チ本村字上
河原山ノ神儘下前田下河原宮ノ腰清水ハ全部流失梨ノ木南割ハ之ニ次
キ反田水上梨ノ木北割ハ浸水位ニ止マリ殆ント安全ナリ
山梨縣水害史ニ多數有志ノ治水ノ意見ヲ掲載セリト雖モ古ヘ行ハレシ
民間防水方法ハ毎年一二月ノ農閑ノ際ニ於テ村内義務人足ヲ以テ河川
中央ノ大石排除ヲ成セリ然シテ三四月ノ雪解水ニヨリテ其部ノ細砂ヲ
流失セシムルトキハ瀬堀部ハ益々深サヲ増ヲ以テ秋季大水ノ際モ河水
中央ヲ奔流シテ容易ニ氾濫スルコトナシト之ニ於テ翌年又同時期ニ同
様ノ瀬渫ヲ爲セリト云フ
明治四十年ニ於ケル大水害ハ山岳崩壊ノ爲メ土砂流出シ河床ヲ埋メシ
結果河水汎濫セリト雖モ若シ現今ノ如キ完全セル堤防ナリシナラハ如
斯災害ハナカリシナラン實ニ當時日川ノ如キハ完全ノ堤防ハナク河床
ハ高ク河中又狭キカ爲メ汎濫セサルヲ得サルノ理ナリ又大正三年ニ於
ケル第四號堤欠壞ハ雨水ノ爲メ堤身ノ土砂溶崩ニヨル欠壞ニシテ河水

ノ爲ニアラサルコトハ當夜堤上ヲ警戒歩行セシ人ノ實見セル所ナリ現
 ニ堤塘上ヲ歩ミテ之ヲ檢スルニ各所ニ拳大或ハ尙大ナル土砂流失セシ
 孔アリテ雨水混々トシテ流注セルアリ之等ハ降雨多キニ從ヒテ雨水益
 々浸入シ遂ニ堤防ヲシテ自己溶崩セシムルヤ必セリ千丈ノ堤モ蟻孔ヨ
 リ破ルヽトハ古來ヨリノ實說ナリ治水ハ治山ニ有リトハ現今盛ニ唱フ
 ル所ナリト雖モ斧鉞ヲ加ヘサルノ山人跡絶テ無カリシ太古ニ於テ尙且
 山嶽崩壞土砂流失セシ形蹟ノ存スルアリ日川堤上ニ立チテ東ヲ望メハ
 峰城山麓北方藤井村ヲ見ヨ又其南方石廩村ヲ見ヨ眼ヲ轉シテ東北牛奧
 澤其他各山間ニ於ケル状態ハ土砂流出セシ形態ニ非サルハナシ之ヲ以
 テ見レハ如何ニ治山ヲ講スルトモ災害ヲ絶對ニ皆無ナラシムルコト能
 ハサルヤ論ナシ吾人ハ現在ニ於ケル完全ナル堤防ヲシテ自己溶解セシ
 ムル等ノ愚ヲ傍觀セスシテ一個ノ蟻孔モ發見次第ニ之ヲ塞キテ以テ村
 内ノ安寧ヲ謀ラスンハアラス

國勢調査

大正九年十月一日午前零時本邦第一回國勢調査ニ於ケル本村地内世帯
 狀況左ノ如シ

四ツ角ヨリ東甲州街道南側

三枝 つ 糸 二人 小澤謹四郎 六人 三枝 豊作 三人

三枝 茂吉 六人 鳥居廣吉 五人 小野元兵衛 十一人

全 北側

根津 佐一 十人 長野甲斐造 二人 藤原喜一 三人

日川中學校宿直 一人 全校 丁二人 全寄宿舎 三十二人

全 賄 四人 全門衛 一人 梅本彥次郎 八人

栗原 ぢみの 二人 三森 要造 六人 秋山菊次郎 七人

津島隆之甫 五人 大久保作十郎 五人 柏手 ふゆ 一人

小林 午吉 三人 柏手 七五三次 四人 藤卷 春二 二人

古屋寅造七人 飯島源一四人 田村竹作十人
高木はる一人 飯島清作六人 三井清十一人
小野義太郎九人 小野留吉三人 柏手新太郎六人
早川な茂一人 稻葉常太郎五人 日川郵便局五人
伊藤正良三人

四ッ角ヨリ南甲州街道東側

保坂茂十郎七人 赤澤逸平四人

全 西側

初鹿野延次郎四人 若杉岩五郎九人 小高實太郎五人
田草川幸太郎八人 藤卷藤平三人 初鹿野秋之助二人
糠信高次郎五人 山野喜一郎六人 小高ふさ一人

四ッ角ヨリ西小松街道南側

萩原升太郎四人 柏手信一九人 田草川木村四人
早川脩作七人 早川利兵衛四人 古屋榮助六人

初鹿野靜太郎三人 飯島伊甫四人 小野三吉六人

藤田兼吉七人

全 北側

小林鐵太郎四人 飯島利太郎八人 萩原孝平二人

飯島米太郎六人 田草川松次六人

四ッ角ヨリ北日川街道東側

早川清吉一人 磯野留次郎四人 田草川欽一五人

田村洞平二人 飯島幸平六人 松澤侶治五人

水上きん三人 近藤金作三人 塩澤實五人

田草川猪三郎三人 田村文平五人 佐藤深一人

三枝条吉四人

全 西側

永田吉次郎四人 稱木名院六人 古屋藤一五人
萩原貞次郎三人 磯野奎之助六人 望月刻五人

飯島英造 四人 野澤佳平 五人 河野熊太郎 十人
 磯野唯次郎 三人 高木孫太郎 八人 奥山修三 四人
 河野周太郎 四人 田村龜吉 七人 飯島國造 五人
 柏手繁太郎 一人 成瀬里次郎 六人 高野由太郎 四人
 小松街道及日川街道ノ間

柏手次助 六人 飯島わか 一人 飯島仁造 一人
 小野活吉 二人 磯野傳太郎 七人 日野原利重 五人
 日野原善作 三人 糠信俊 三三人 磯野丑太郎 十二人
 飯島勝太郎 六人 田草川米造 四人 石黒萬吉 七人
 中村東吉 十人 岩間峰太郎 五人 萩原友次郎 一人
 向山庸造 九人 佐野喜一 九人 養學秀詮 二人

計世帶數 百十二 人口 五百三十一人

進世帶數 三 人口 三十九人

總計 人口 五百七十人 內 男 三百八十八人 女 二百六十二人

國勢調査ハ日川街道ニヨリ本村ヲ東西二區ニ分割シ日川街道以西ヲ第一國勢調査區トナシ以東ヲ第二國勢調査區トナス而シテ尙便宜上第二區中三枝桑吉ハ歌田第四區ニ屬セシメ歌田區内ノ神戸由太郎奥山庫吉武井伴藏三名ヲ第二區中ニ編入セリ又第二區中三枝つね根津佐一藤原喜一長野甲斐造四名ハ平素歌田區内ニ屬セルモ今回第二區中ニ組入タリ

調査員 第一區 小野元兵衛氏

全 第二區 三井清氏

豫備員 磯野丑太郎氏

全 飯島勝太郎氏

全 飯島利太郎氏

全 磯野奎之助氏

明治三年陣屋引揚當時ノ人家

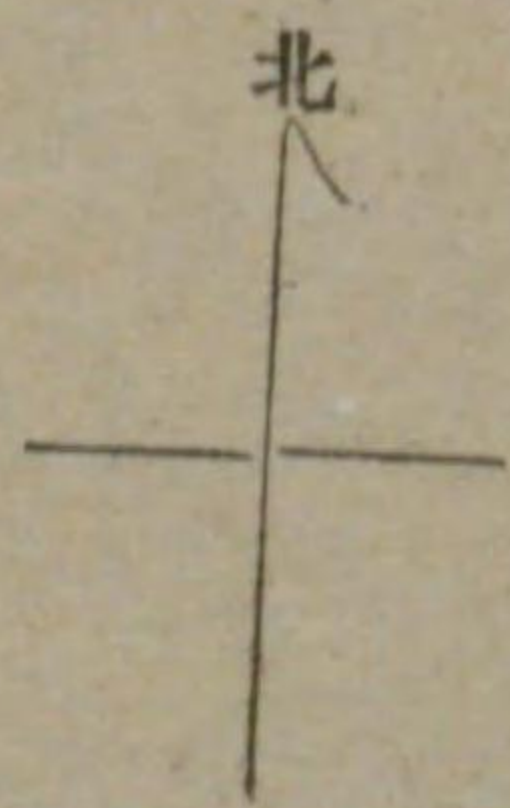
- 一 小野 治助
- 二 初鹿野市郎右衛門
- 三 小茶屋
- 四 水車 彌七
- 五 飯島 彌七
- 六 籠屋
- 七 柏手三郎右衛門
- 八 初鹿野市右衛門長屋
- 九 高野利右衛門
- 〇 元標 二村番人小屋
- 一 三宰屋
- 二 內藤順清 水車
- 三 井慎齊
- 四 小野七郎右衛門水車
- 五 小野七郎右衛門
- 六 小野七郎右衛門
- 七 小高又右衛門
- 八 古屋清助
- 九 飯島又兵衛
- 〇 早川佐兵衛
- 一 二小野與兵衛
- 二 初鹿野茂八
- 三 小野清右衛門
- 四 小野治郎右衛門
- 五 田村七左衛門
- 六 小野元兵衛
- 七 初鹿野治兵衛
- 八 飯島彌兵衛
- 九 初鹿野治兵衛隱居
- 〇 早川庄兵衛
- 一 飯島三左衛門
- 二 飯島伊右衛門
- 三 柏手次郎兵衛

- 一 柏手 ぬん
- 二 飯島善左衛門
- 三 田草川豐兵衛
- 四 田草川幸右衛門隱居
- 五 田草川幸右衛門
- 六 萩原清之丈
- 七 小林庄三郎
- 八 糠信富右衛門
- 九 小高宗兵衛
- 〇 岩間宇兵衛
- 一 糠信角平及隱居
- 二 河野常八
- 三 岩間仙之丞
- 四 高木源右衛門
- 五 岩間市兵衛
- 六 岩間仙之丞持家
- 七 萩原元四郎持家
- 八 飯島
- 九 飯島長兵衛
- 〇 飯島平右衛門
- 一 飯島澤右衛門
- 二 岩間仙之丞
- 三 初鹿野豐次
- 四 古屋勘兵衛
- 五 初鹿野又左衛門
- 六 古屋直一
- 七 根津勝七
- 八 早川文吉
- 九 小野七郎右衛門長屋
- 〇 小野與次兵衛水車
- 一 小野與次兵衛
- 二 早川瀨兵衛長屋
- 三 早川瀨兵衛
- 四 柏手久右衛門
- 五 飯島太七
- 六 田草川市郎右衛門
- 七 佐藤新右衛門
- 八 小野七郎右衛門長屋
- 九 古全

一〇九 初鹿野又左衛門水車	一〇六 大木 興左衛門	一〇三 水 上 三 藏	一〇〇 高野 茂右衛門	九七 飯島 四良左衛門	九四 萩 原 清 八	九一 田草川 乙兵衛	八八 飯島 周 兵衛	八五 飯島 仲 助	八二 飯島 太左衛門	七九 佐藤 新左衛門	七六 全
一〇七 初鹿野市右衛門水車	一〇四 若 尾 由 太 郎	一〇一 田草川 仙三郎	九八 飯島 吉左衛門	九五 初鹿野市右衛門	九二 石 黑 初右衛門	八九 佐藤新左衛門隱居	八六 久 保 田 久 吉	八三 磯野 重左衛門	八〇 高野 伊 兵 衛	七七 初鹿野 喜左衛門	七四 小野 宗左衛門
一〇八 岩間宇兵衛水車	一〇五 初鹿野 保右衛門	一〇二 田 草 川 熊 造	九九 磯 野 原 泉	九六 岩 間 角 右 衛 門	九三 飯 島 萬 藏	九〇 柏 手 太 一 郎	八七 磯 野 武 兵 衛	八四 日 野 原 茂 兵 衛	八一 飯島 五良右衛門	七八 飯島 五良右衛門	七五 飯島 五良右衛門

四〇

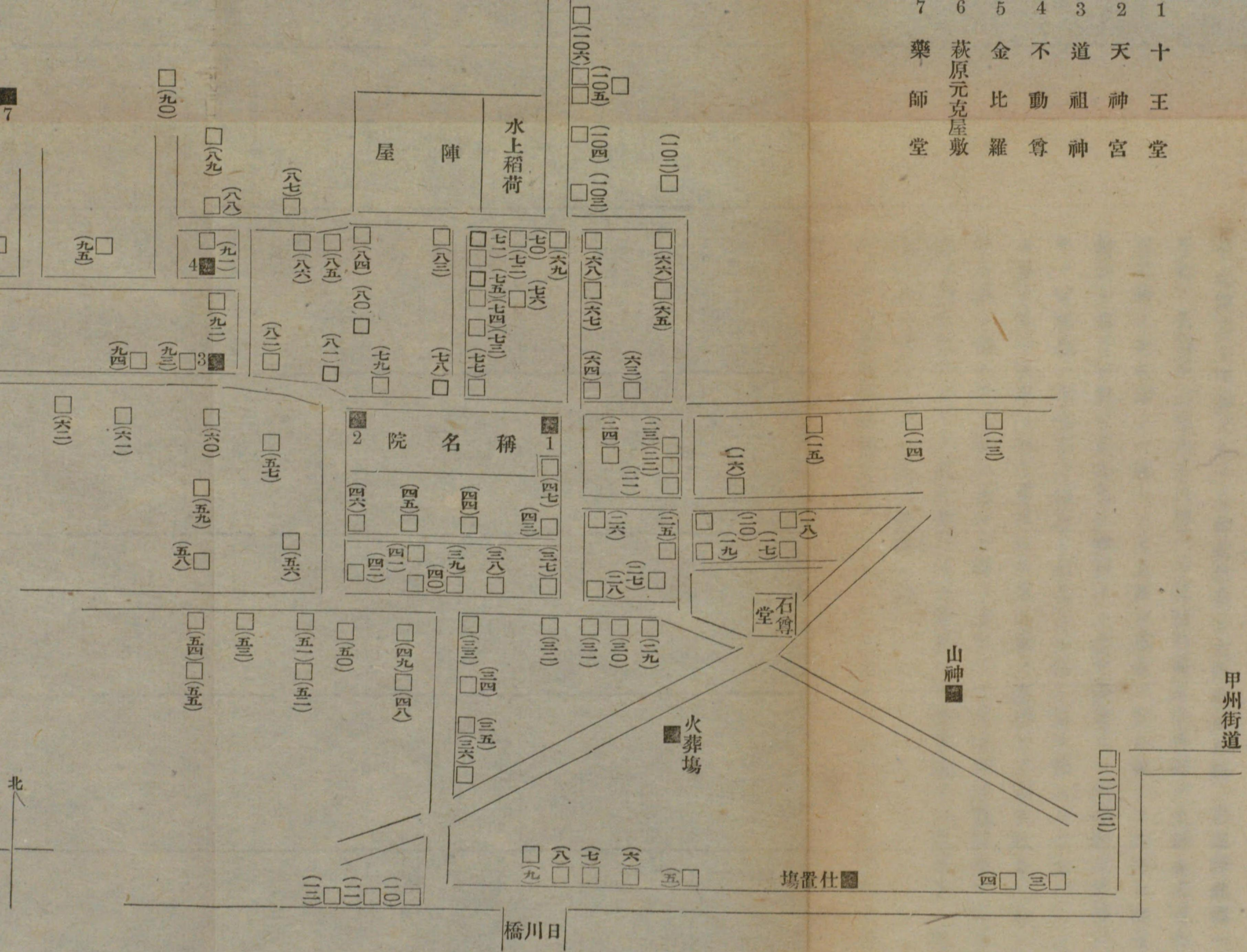
白山社



(五九) □ (五六) □ (五四) □ (五三)

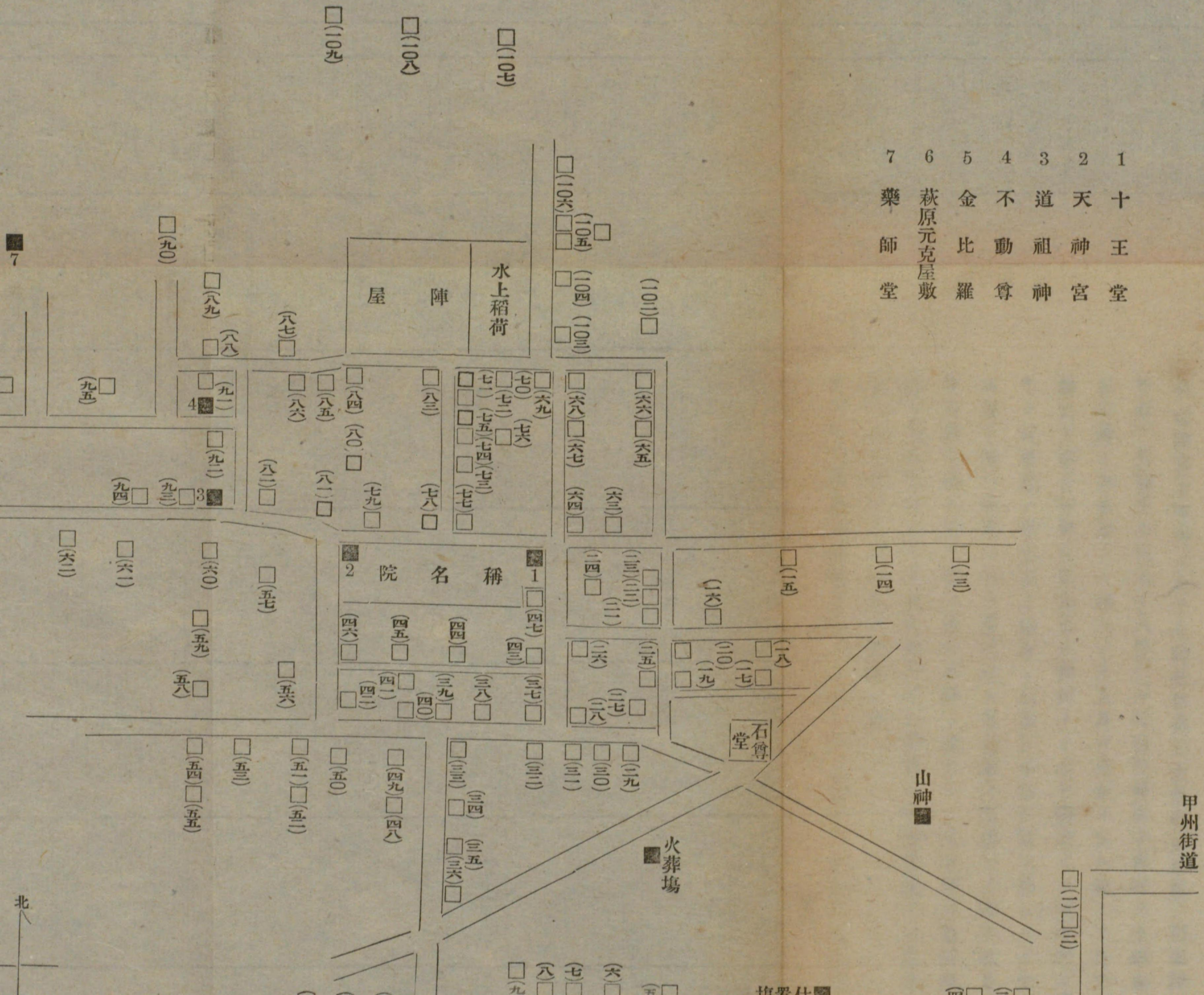
明治三年陣屋引揚當時ノ人家略圖

7 藥師堂
 6 萩原元克屋敷
 5 金比羅
 4 不動尊
 3 道祖神
 2 天神宮
 1 十王堂



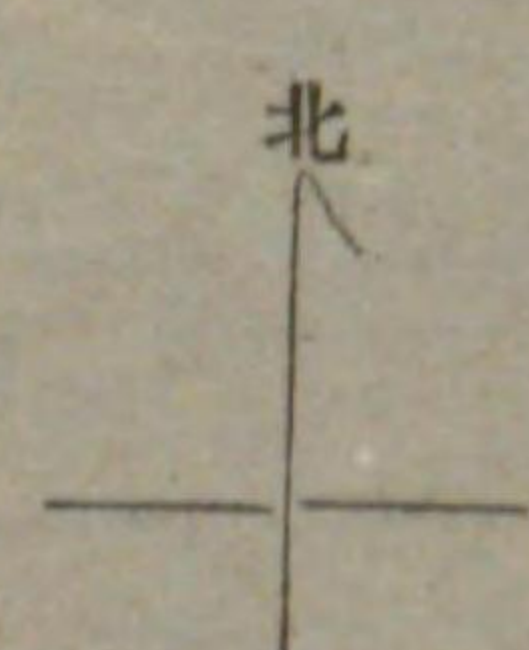
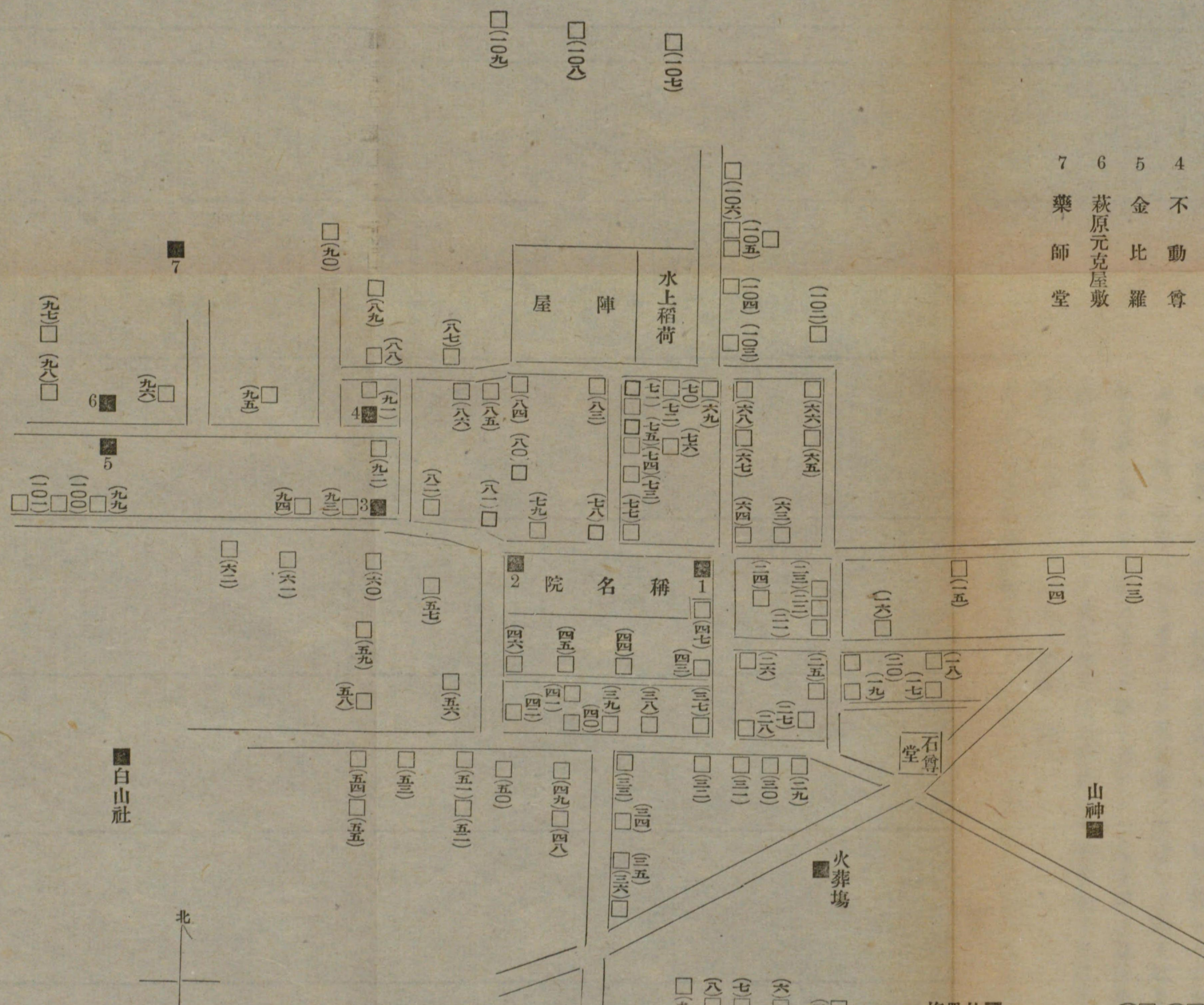
明治三年陣屋引揚當時ノ人家略圖

- 1 十王堂
- 2 天神宮
- 3 道祖神
- 4 不動尊
- 5 金比羅
- 6 萩原元克屋敷
- 7 藥師堂



北

1 天王堂
 2 天神宮
 3 道祖神
 4 不動尊
 5 金比羅
 6 萩原元克屋敷
 7 藥師堂



二平朝皇臣尉當朝八人家湖圖

堂宮御尊麻原

甲麻原

神 社

白山權現

(甲斐國志十四卷ノ五十七神社部第三山梨郡栗原筋) 御朱印社領一石八斗餘 社地千六百八十八坪 一町田中南田中兩村ノ土神也大石和筋橋立明神ノ御朱印ト一紙ニシテ上萬力神主ノ家ニ藏セリ相傳テ神護景雲加賀ノ國石川郡白山比美ノ神社ヨリ之ヲ勸請スト云神体ハ金像ナリ寬永ノ頃築前ノ國博多ノ賊之ヲ取去リ本國ニ歸リ韃ニカケケレトモ鑠ケス却テ其一族或ハ病ミ或ハ狂ス盜人甚タ畏怖シテ復タ社邊ニ捨テ去ル里人夢ニ神ノ話ヲ蒙リ再ヒ本殿ニ安置スト又狩野元信所圖神像及ヒ明應中獅子頭一ツアリ社中獅子石三各高二尺五寸圍ミ二尺此邊ノ地名ヲ神ン澤ト云シヲ今ハ訛メ蟹澤ト云

現今本殿渡殿拜殿等アリ

石鳥井ハ明治四十年八月ノ洪水ニテ流失セリ其左柱ニ北田中ト刻シア
 リタリ
 元治二年正月田安陣屋代官及ヒ屬吏ヨリ寄進セシ石造ノ獅子一對モ境
 内ニ現存ス
 太神宮拜殿ノ左ニアリ以前ハ前田大神面ト稱スル畑中ニアリタリト云
 フ
 男石女石ハ鳥井及拜殿ノ間ニシテ道ノ左右ニアリ初詣ノ際男女ノ別ニ
 ヨリ參詣ス
 疱瘡神太神宮ノ東ニアリ蕉園生祠ト同所ニアリタルヲ此ニ移セリト云
 フ

御陣屋水上稻荷

本村磯野丑太郎氏先代鎮守ナリシモ田安家ノ治所ヲ此ニ置クニ際シ陣
 屋敷地内ニ圍ハレタルヲ以テ陣屋守護神トシテ祭ラル、ニ至レリ社内

懸額及碑文左ノ如シ

拜殿ニ掲ケタル額文

(假名遣ヒノ誤及磨滅ノ字アリ)

水上乃稻荷ハ大明神ト稱ヘ奉れるはこゝの邊りを字して水上といへる
 よりてまゝこの大神ハ此田中ハ館ニ鎮りましまは由縁ハそのゝ此里
 なる境田といふ處ニ古き塚有りて塚乃上おふるく齋ひ祭る稻荷ハ祠あ
 りまゝ塚の内ニ穴を穿ちていつの頃よりか住る狐ありて年々子
 生まきこゝ里人武兵衛カ持ふる田どころのうちにありまれの狐子らむ
 毎み赤飯をのしきて祝ふ事を例としてあまゝ年過ぎゆく程み狐とも
 ふるひろこり々まゝ其わたりを狐原とも呼しとかや武兵衛のむす子を
 次左衛門といひきある日耕まいて、塚のあたりは息ひつゝ見れハ親狐
 の其子等をひきゐてもやしをるさほ人を恐るゝけそひ聊もあらは思へ
 らく彼ハあの神の御使ニ我輩の常ニこの神を尊ふ事を知りてゝる
 まやと頻まおもひおこすよしありて寶永の某の年くちたる祠を造り
 へてゝる家の守護神とあふきまつりき其後重川の水あふきて多くの田

畑をあらしたるときこの塚もなうそよゝゝ流れたれに次左衛門里人と
 事謀りて祠を今の所ようつしぬ其頃こゝの郷藏の屋じきよして免くり
 よ大土手ありて竹よ木よ繁く生立たるにあらぬ狐とも一夜のうちよ穴を
 穿ちてのしこよりうつりすみて年よよ子を生む事まよ初如しらく
 て次左衛門の弟れ名を武兵衛と改めさせ家をゆつりて自らの其うらる
 る某の家を續きしとそ享保十二年未のとし武兵衛京ある稻荷山の社よ
 参りて神の御位を申請ひて霜月七日甲府まで歸り着る其夜もまたの
 狐むせ出て藏守藤兵衛と云へるものゝ家の上よりして郷藏の庭までを
 ちつよきて躍るか如く舞ふが如し藤兵衛垣間見たるみ白き黒き赤きい
 ろよの狐とも藏の庭よみちよたり夜あけて里長にも告たるよあよ
 事のさあよと人皆おどろきかつのあやふみけると其日八日武兵衛歸り
 来てやめて神の御位を挙げり其折しも神の御前よの白き狐よきり左よ
 向ひ居りよろこ得しき聲を挙げたりとあんなれより年毎の例として霜
 月八日を祭れ日と定めけるをのちよさりのたきよし有りて九日よなむ

換へしとそ延享四年山梨八代ふた縣のうち六十むらあまりを田安の殿
 のえろし免してまなわち此里ある郷藏の地よ館をのまへて彼のむら
 くの治め玉ひしよりやめて御安らるを作りて館れ守護神と崇め玉ひ
 ろくて後山梨郡鎮目邑太郎左衛門の妻俄よものよけつきていへるよふ
 我の田中の稻荷への里なる武兵衛の家まで送りやるへしそれより館
 よ歸りあんどいへるよし人あまたして送り來けるよ武兵衛の家奥床
 よまをりてあるしを呼ていへらく汝のたよりとく我を仰くことあつく
 して今の社ようつして多くれ人れを守らん事奇特の事よされの今よ
 り三年のうち汝の心むけによりてあまたの人を苦しめそれにつきて汝
 が家もほろひぬへき禍事ありれ是を免れしむへし其後こと更に我を
 あふく人來りてよく我よあつをましますよ縣の民を守るへしと云
 終りて社のうち迄ゆみ行て倒れふしけるのちの夢のさめたるか如く
 常のこよちよ成りて我村へ歸り行しとあんなくる年の寛延の二とせあ
 り故有りて國中の人むらよ騒き立て八代の郡米倉村ある人の家をう

ちこほちし事有りこゝの縣よの武兵衛を觸元として日を契りて寄合ふへきよさゝ先なるを其日よかりて武兵衛この社よいのりて神籤をとるに三度まであしき籤を取りけれの去年有りし神のまさとしを思ひ合せて既よ去たゝめたる廻らし文をやきてかねての誓に肖きたれこの縣のむらゝにの獨として彼の騒ぎにあつかるものなく其ほとん譏る人も多ありけるに其後他しむらゝの國の御法にそむける旨をもてそれゝの罪に行われけるをこゝの縣にの禍を免れけるのまか御は先言をさへ蒙りたる事またくこの大神の御惠よよりて之其のち岡本の君あれたの令として此館にもし玉へる時深くこの神をたふきて朝ことよ湯あみして社にもふて給ふよ白き狐よあゝ瑞籬の内に見わしの日をふるまゝよ夜晝のわかちかく顯れ出たりけれの人々くしき事におもひあへりさて武兵衛か家の館よ隣りたるよ重くもかさを患ふもの有りて已よ事切れたるを武兵衛社よ参りて其命を救いせ玉へと深く乞願ひける折しも君より使して今れた白き狐垣を越て汝の家よ飛行きたれに救

いせ玉のん事疑ひをしと仰けるよる先なるもの忽よよまへりてほとろくいえゑりけり君の素より神を崇め玉ふ上よゝる事共を感じしめしてそこはくの費をいとわす京へ人をよせて吉田の殿より正一位水上稻荷大明神の御稻荷を申請ひて御安らかなの額鳥居の額をも懸あられため給へぬそれよりして名たゝる社とましゝて其御陵威も日よゝよあられたよましゝける此よ文久の二とせと云ふ年磯部君こゝよ來ませる時此館の多くの年月を経るまゝゝ朽そこあわれたる所多ありけれの同じ三年の正月事よしめて四年といふ年の三月までよことゝく造りあらためけりこの時縣のむらゝより此大神を仰き奉る人々おのもゝ黄金をさゝげ君とともよましく計りてみやどころを館の丑寅の方へうつし奉り有しより廣らかよものして拜殿玉垣石あきけひちよ至るまで造りあられためていとゝうるわしく成とゝのひぬ其費五百兩といふ數よ餘りせるよしあくて此神の鎮ります由縁のあるゝ社の碑を建たるその詞の君の撰らみ玉へるよて高齊の君これを書玉へり磯部君こ

の社は傳はりたる舊き志るへふみをもて貞賢よしめしての玉ふよふま
るの碑の詞に此記のさとひ文をとりて漢辨よものしたるあり漢の辭に
常乃人の耳ようとしのん取ふみよのきとりて社の内よ掛をきたらんよ
の参り來る人誰もくもよみさととりはへきものを其筆とりねどの玉へ
るををちるきおのをかいてかきと思ひ志らまひをるものあらまお
もへの己の素より神よつかふへきもの之神の御心よもあし人よりと
と思しゆるし玉ふるしよ有へくやこそをさ君のおもひ寄玉へる旨の
まかち書つゝせるあくの如し

八代郡弓削神社々主

元治元年九月

朝散大夫能登守鞞連貞賢

お取し年の霜月の九日これを掲ぐ参り來る人くこれをよみ神のま
いのいち志るくまします事をよくく思ひもかく事かくこの世よ在經
ん事をこひ縁かひねるし志る(數字磨滅)おもふことを拙き筆の跡も思
ひて志るはもの

縣令含翠庵主人

碑文

水上神祠之記

甲陽田中府水上社爲一境之鎮護神然而不知創于何代也距甲城東三里有
村落號一町田中瓦屋櫛比田園繡匝頗爲富饒之地矣村北重川之際曰境田
有一小阜振古以來靈狐穴之故稱其地曰狐原本村磯野武兵衛田宅與阜接
壤故以朔望炊赤豆飯祭之有年于茲寶永七年庚寅武兵衛男次左衛門仍舊
構而修小祠以爲其家守護神爾後一歲重川水漲堤崩阜潰祠隨流失次左衛
門與里正議新營小祠于本村社倉地水上此地竹樹森蔚曠無人居靈狐一夜
誘群狐鑿數穴而窟宅爲未幾次左衛門男武兵衛詣京師伏水神社乞得稻荷
神號歸矣前夜群狐廻旋神祠其狀如喜而隱見于燐火焰焰中里人皆驚異之
及武兵衛納神號於祠中而驗群狐之前知也時享保十二年丁未十一月八日
也茲後祭以此日會有事故改爲九日至今不變也延享四年丁卯以本村並山
梨八代六十有餘村三萬餘石爲

田安閣下采邑建官府於社倉地乃以水上神為一境鎮護大營神殿又建華表竟為輪奐寬延二年己巳惡徒蠢起毀破八代郡米倉村某氏家於是田邸采邑諸氏以武兵衛家為會議所適郡中檄至武兵衛時為里正而繼父祖志信奉水上祠故卜吉凶于祠頭而欲舉事一心默禱以探神籤三次皆凶武兵衛乃了神意焚郡中檄不敢報之眾議以為怯矣數月之後官裁已定就重刑者數十人而田邸邑氏無復預者焉先是武兵衛親族山梨郡鎮目村太郎左衛門妻忽發恠狀狂舞揚言曰吾為田中官府鎮護神今將赴武兵衛家宜送而至焉既至則狂女南面大聲呼武兵衛曰自今三歲之內汝心不戒則厄數百人而汝家亦隨斷滅能崇尊我當免此災言畢狂女顛仆須臾之後如平日云及己巳之事起蓋知神靈狐出現屢呈奇瑞岡本氏感戴不已差使者于吉田為乞位號乃得正一位水上大明神位記天保三年壬辰田中府下增地山梨八代巨摩三郡之內四十有餘村一萬七千餘石而府之繁昌神之威靈可以知矣文久壬戌之秋余辱恩命來宰於此此時廳堂經百十四歲而圯壤不修且其規模狹少不能容治下五万石之眾庶故奏柘邱地而大堂宇之議有司允之郡民助之又欲廣水上祠

併修神殿而造瑞垣以輝神威議之于郡民郡民獻金殆及六百乃亦奏之有司褒稱而為可也於是移神地於府東北隅以本年正月八日竣功矣乃為祝詞云官府久榮郡中永昌無災無難五穀豐饒萬民快樂又錄舊聞為神祠記如此

文久三歲次癸亥八月

納戶頭縣令磯部最信撰

奧結單山高齊有常書

獻金之碑

水上社拜殿瑞牆石壁記碑其外諸入費獻金姓名

- 一金七十兩 初鹿野市右衛門
- 一金百兩 小林八右衛門
- 一金五十兩 加賀美嘉兵衛
- 全 小川奧右衛門
- 一金二十五兩 網野善右衛門

一金三十五兩

志村勘兵衛

一金三十兩

内田作右衛門

一金二十兩

雨宮彦兵衛

全

早川七郎兵衛

全

古屋惣兵衛

全

河西兵助

全

内藤文藏

一金十五兩

小野七良右衛門

全

萩原武兵衛

全

内田次右衛門

一金十兩

安田多膳

全

雨宮利左衛門

全

加賀美角三郎

全

歌田權左衛門

全

土塚邑

八之丞

全

上市之瀨邑

音右衛門

一金七兩

小林邑

佐兵衛

全

寺部邑

安右衛門

全

全

三左衛門

全

平岡邑

傳右衛門

全

中野邑

要七

全

鮎澤邑

彦兵衛

全

小室邑

織右衛門

全

春米邑

文吉

一金五兩

全

楠半左衛門

全

全

長澤平右衛門

全

全

淡野忠兵衛

全

全

萩原周兵衛

同所ニ石燈籠一對アリ寄附者氏名

- 横田兵五郎
- 成瀬官一郎
- 山本鉄次郎
- 小林松次郎

文化十二年

- 金井源兵衛
- 金子清(不明)
- (不明)田(不明)

石段上石鳥井寄附者氏名

- 吉田藤五郎
- 山口多兵次知厚
- 山口彦三郎信廣
- 谷十次郎本脩
- 谷文五郎正安

手水石鉢寄附者

常夜燈一對寄附者

- 内田貞次郎
- 市川幸太郎
- 原庸之丞
- 野澤平三郎

御普請御用掛

- 小野次郎左衛門
- 小野元兵衛
- 初鹿野保右衛門

文久三年九月

階下石燈籠一對

寶曆七年十一月

階下石鳥居

- 初鹿三郎兵衛

石鳥居ハ御岳權現内ニアリタルモノナリ年月及寄附人名アレトモ不明ナリ

孝行唄

萬延紀元庚申仲秋田安府縣令磯部最信著

それ人間と
 まつ孝行の
 おやふふのうれ
 鳥けさものよも
 古人のち一め
 それ孝行の
 おや乃おゝ飯を
 くらふをりきじと
 遊女はいくは
 大酒ころ飯ん
 ばくあきとゝう

うまれては
 みち我し生
 ともあらは
 れとれりど
 おかられたり
 ねもむきい
 とろおばせ
 つゝしみて
 ゆさんごせ
 ひせある先
 おくそせす

まへて公儀の
 そむあぬやうよ
 何さそくをき
 それく家業
 ところのゑく人
 ひとをあがめて
 何にをうやまひ
 めくきてあんな
 何した人よ
 あきある友族
 おんれいまるには
 さどれひんぬよ
 おやよ孝行
 もど先てゑどの

御法度を

あひほもり
 ねたぐ縁で
 おこゑら
 せしうへ
 かるし先
 ねとうせ
 むつまし
 せをさ
 志たふへ
 捨乃容儀
 ありたら
 何るひと
 つまどせよ

ふ志ん諸道具
身のぬんげんを
れおり我慎み
かりあるもれは
なるたけ志やく財
お、彼よかけて
利徳をほしある
をんおのよめ入
志うとめしうとを
おもふてあつく
里んき志つとを
夫よていせつ
もし先妻乃
おろそりよまお

六〇
きるものも
あへりまて
おんるくし
はやうへし
せぬやうよ
まちならぬ
こと取あれ
まゐるさきの
ち、は、せ
かうくし
つ、しみて
れこたるお
子おあらは
をさる子我

あどにのこして
なりきわられれ
いりもうりぞと
ほおとれと、よ
ふりくあられま
れや子けふたい
夫婦のあひさ
いかりれ、しる
いどもめてたき
をさるきときい
志もしううちも
したひしものを
あいよひうれて
うとくありゆく

六二
ゆくひと乃
かゝしさは
おもひやり
おもひかそり
そたつへし
よ免志うと
やもらきて
おとるきは
こと終あし
ふたれやを
はあれじと
つまや子乃
いつとるく
うたてさよ

わう子茂あわれむ
おやの志ひをも
子をもつ人も
父母よ孝行
また奉公を
主人を親と
かげ日あたかく
其身を、します
もし父母お
わけあく己れを
まののうく
みつからせめて
親をうらむる
父母よ孝行

あゝ後もて
れしはあり
わきてあは
そげむべし
する人
同様に
うやまひて
つかふべし
れろかよて
にくむとも
たらねばど
つゆほども
おとあかれ
する人は

子孫のさるるも
家のはんじやう
子のよしあし
子をよくそだて
つねく親の
よけれの子もよく
いかほごきびしく
親の身持ちか
おのづと子供も
どいへたとひ
不道はうらつ
子のまねをせず
をり茂見合せ
たいしき道よ

ねもふべく
するせぬも
よる終あし
あぐるよ
あすわざか
あるものぞ
あかりても
ふらちあり
父母か
なりとて
身を修め
いけんして
さそひいれ

親よ 悪名
両親先祖の
それほどくよ
くやう施僧乃
人目をかさらに
善提の爲よ
手向けのせぎやう
僧をたのみて
みつからせぬは
あるたけ自身も
親の存命
あよはと孝行
死しての後の
をろそかよせる

とらせあよ
ついでせんは
志たのひて
善を積みめ
志ん實よ
回向せよ
念佛を
たれととし
捧りやくな里
律をひべし
せしときよ
ありとても
追善を
ともからは

孝をつくすよ
八まん宮の
とほきをおいて
親よ 孝行
神も佛も
つねよまもらせ
其の身もやすく
餘慶をうくる
神明陀佛
をしへをまもり
一期おこたる

あらまとは
たくせんよ
ねんお返よ
ある人の
あもれみて
たもふゆゑ
子孫まで
あま捧あし
聖賢の
孝行を
事なかを

終

右ハ田安府侍講花城中村知雄筆上刊ノ上各村ニ一本ヲ頒チ以テ勸善セ
ントナシタルモノナレトモ惜イ哉部數ニ限り有リテ同氏ノ意志ヲ一般

ニ布衍スル能ハサリキ仍テ茲ニ附記スルコト、セリ
御岳權現

大和ノ國吉野郡金峰神社ヨリ勸請スト云黒印社領一石六斗六升社地六十三坪字梨ノ木北割ニアリシモ今ハ水上稻荷境内ニ移セリ

蠶影山

水上稻荷境内ニアリ

天滿天神

水上稻荷境内ニアリ口碑ニヨレハ現稱名院境内ハ以前西山梨郡甲運村字川田組長谷川源之丞氏持屋敷ニシテ鎮守天神ナリシヲ日川氾濫ノ爲メ稱名庵流失シ現稱名院トナスニ際シ鎮守天神ヲ梨之木南割千二百四十五番ノ地ニ移シタリト云故ニ例祭ニ際シテハ稱名院ニ於テ赤飯ヲ炊出シタリト云フ

古老ノ曰ク稱名院境内西北隅ニアリテ正月及七月二十五日ニ例祭ヲ施行セリト明治三年前田ノ天神免田ニ移轉ス地所一反歩内二畝歩ヲ高ク積ミ上ケ天神宮ヲ拜祀シ道祖神ヲ合祀セリ村持チトナシ外六十坪ヲモ村持チトナス餘分ハ士族佐野茂富ナル者ニ拂下ケタリト云フ

小島蕉園生祠

御陣屋稻荷境内ニアリ以前御岳權現境内ニアリタルト云フ一時本村大革命タリシ明治維新ニ際シ諸神社等ノ祭典ヲ中止スルノヤムナキニ至リ生祠祭亦中絶セリ茲ニ大正七年十月十五日日本村秋季例祭ニ際シ生祠祭ヲ復興シ頌德之碑ヲ建設シ基金ヲ作リテ保存法ヲ講シ本村青年ハ永久ニ社内ノ清掃ニ勉ム同十一月十九日ニ於テ從五位ヲ下賜セラレタリ蕉園翁ハ一町田中田安家代官ニシテ德望極メテ高ク部下六十三ヶ村有志相謀リテ生祠ヲ建設セシナリ大正七年四月文部省ニ於テ蕉園傳ヲ公ニシタリ我邦生祠ヲ建ツルモノハ頼杏坪岡田寒泉及小島蕉園翁ノ三名

ナリト現ニ國定教科書修身書第五卷中ニ記載セル所ナリ翁ノ生祠ノ如キハ實ニ國家的保存物ナリト謂ッベシ

小島蕉園翁頌德之碑

碑ハ生祠ト併置セリ大正七年十月十五日樹立セリ碑文左ノ如シ

小島蕉園翁頌德碑

侍從次長正三位勳三等伯爵德川達孝篆額

內務省纂成民政史稿大正四年鉛槧告竣進供

乙夜之覽中有載小島蕉園翁之事蹟予時承乏山梨縣知事旁搜知其以儒致治化闡幽顯晦之意殊切尋轉赴任山形縣近者甲州舊治鄉人胥謀將復興生祠竝勒貞珉壽其懿績來屬文予欣然應之夫近古以儒底吏績民慕爲建生祠者西徼有賴杏坪常有岡田寒泉甲有蕉園翁而其超邁狷倍盡瘁民治肥遯刀圭澹如無所窒礙者獨推翁矣翁名彝字公倫通稱源一明和八年生於江戶寬政元年齡十九甫仕田安宗武十二年受試於昌平黌第經史文章科文化二年

爲代官赴任甲州治田中應州俗悍亢難治翁入府首問民瘼銳意圖治亡幾德音惠澤洋溢境內人稱神明居三年以病辭職獲甲斐德本之禁方慕其爲人隱逸樂醫與母居奉菽水之觀親故有急傾囊赴給家無儋石之儲環堵蕭然甲人聞翁窮持百金遙來賙翁不受饗而返之甲人景瞻不措爲建生祠後文政六年一橋治濟起翁使治其封遠相良翁之就府折貧民券撫化致治九年正月患癘會唐舶漂至事急翁不待官裁擅行給米粟薪水救之藩聞厚賞之是月病革卒於所治享年五十有六銘白

行于民猷 藏于仁術 煦化踰堂 肘方入室

扁鵲孝廉 弗二而一 經邑醫瘼 如養嫩苗

維岳之陰 山爭嶸嶂 比翁徽功 靡一可匹

勒石傳芬 馨德長茲

大正七年十月十五日

內務省地方局長從四位勳三等添田敬一郎撰

從六位勳六等秀島醇三書

道祖神

御陣屋稻荷境内石段下ニアリ以前梨之木北割千百九十二番地道祖神境内ニアリタリト云フ

田安陣屋趾

御陣屋稻荷西方ニシテ稻荷ト共ニ四周溝渠ヲ以テ區劃サレタル地ニシテ延亨三年以後明治三年五月ニ至ル迄田安家ノ地所ヲ置キ石高三萬四十一石六斗二升八合五勺支配村六十三個村ノ政治ヲ執リシ所ナリ現ニ稻荷神社前石橋ハ陣屋内ヨリ馬場ニ通スル裏門ニ架設シアリタルモノナリト云フ

石尊大權現

秋葉大權現

梨ノ木南割千百七十六番地ニアリ文化九年相模國大山阿美神社及遠江國秋葉大權現ヲ勸請セリ

山神宮

石尊山境内ニ合祀セリ口碑ニヨルニ古昔大水災アリシ際土砂ヲ搬出シテ山トナシ其頂上ニ祭リシト字山之神地名ノ存スル所ナリト明治戊辰柏尾戦役ノ際官軍之ノ山ニ昇リテ見物ヲナセリト平素ハ兒童ノ好運動場ニシテ特ニ三月節句ノ際ハ花見場トシテ全村ノ兒童此ニ集リ終日ノ觀ヲ盡スハ生ケル雛壇ノ如カリシト云フ世ノ開拓ニ伴ヒ之ノ運動場亦開拓崩壊セラレ山神宮ノ石祠ハ石尊社内ニ寄留ノ運命ニ陥リ明治四十年ノ水災ニヨリ石祠亦流失シ今ハ其名ヲ存スルノミ

庚申堂

梨ノ木北割千百三十二番地ノ隅ニアリタリ今ハナシ尙道祖神境内ニアリシモノハ道祖神ト共ニ水上神社境内へ移セリ石像乃チ之ナリ

二十三日

不動尊境内ニアリ

不動尊

下總成田山不動尊及相模國大山不動尊ノ講中アリテ今尙堂宇完存ス獻立古シト雖モ年代不明ナリ

行者塚

北河原ノ耕地ニアリ安政六年七月重川大水ニテ流失ス行者免田ハ三枚田北小澤東北ニ一俵四桶アリタリト云厨子ハ不動堂ニアリ

光雲山稱名院

淨土宗智恩院ノ末(甲斐國志十七卷ノ七十五佛寺部第三栗原筋)黒印寺内六十六坪 天正元年西譽文眞三日河ノ側ニ一庵ヲ架シ光雲ト號

シ四世ノ近譽門午ニ至リ寛文六年村内ニ移シ今ノ名ニ改タリ寺寶ハ信玄所持ノ水晶ノ珠數一連勝頼敗走ノ時納メ去リシト言傳ヘタリ

本堂 間口七 間 奥行 七間三尺

庫裡 間口六 間 梁間 四 間

書院 間口 三間三尺 梁間 五 間

鐘堂 二間四方

表間 九尺二間 文久元年建築ス

本尊阿彌陀如來 立像 木製御丈一尺八寸坐臺一尺二寸厨子入

両脇土觀音務至 立像 木製御丈一尺一寸坐臺一尺一寸

圓光善導兩大師 座像 木製御丈一尺五寸坐臺八寸

開山 像 腰掛 木製御丈一尺八寸

菅原道實公 座像 木製運慶作御丈九寸五分天神社ヨリ移セリ

梵鐘 經 二尺五寸 高 四尺八寸 重量 一百二十貫

鑄物師雨宮十左衛門源郡宣 寶曆十一年七月施主村中

半鐘 經 一尺一寸 高一尺八寸

七四

鑄物師同上人 十一世澄譽代施主 念佛講中

建物ニ就キ沿革由來本堂ハ箱棟ニシテ表裏ニ菊桐ノ御紋章アリタレト
モ寛政年中十一世澄譽再建十七世進譽營繕ノ際屋根ヲ方形ニ改ムル故
ニ以後御紋章ナシ之レ當山ハ今上天皇聖化無窮ノ尊牌ヲ本尊前ニ奉安
シ中興ヨリ曆代ノ住持職明治初年マテ御倫旨ヲ拜戴セシ故舊來ハ寺紋
ニ尊牌用トシテ菊桐ノ御紋章ヲ用ヒタルナリ
中興ハ四世近譽門午上人ニシテ智恩院直末トナリ今ノ地ニ移リ光雲山
稱名院ト公稱シ小本寺格ニ付十六世願譽隆悔上人ニ至ルマテ御倫旨ヲ
頂載セリト云フ
外ニ佛像

内佛本尊阿彌陀如來 立像 木製 高三尺六寸

地藏尊 立像 木製 高二尺七寸 厨子入

全 立像 木製 高三寸三分 厨子入

韋駄天王 立像 木製 高一尺三寸

誕生佛 銅像 三寸三分

阿彌陀佛 銅像 高八寸

書畫

御名號 絹本 總本山大僧正筆 壹幅 十一世澄譽拜領

曼多羅中尊佛 紙本 壹幅 初鹿野市右衛門寄附

羅漢之畫 渡邊華山筆 壹幅 小野七郎右衛門寄附

等其主ナルモノナリ

寺産大正八年六月 田 五反五畝三步 畑 一反八畝八步

宅地 五十一坪

寺領境内 三百七十九坪 境内接續墓地 四畝四步

檀家共葬墓地 六十六坪ハ明治維新上地トナル

萩原元克手蹟鯨丸墓

七五

稱名院本堂裏萬靈塔側ニアリ墓地移轉ト共ニ共葬墓地ニ移サレタレト
モ元克手記ニ係ルヲ以テ萬一水災等ニヨリ流失ヲ虞リ現地ニ移セリ墓
誌左ノ如シ

片歌道主鯨丸墓

鯨丸者築前國福岡之人也受門業建綾足遂冒建氏爲嗣ト居于東都池端而
以國學及片歌講授焉天明五年乙己五月七日客死於峽之山梨縣田中邱亭
年五十有九而葬于稱名精舍片歌道主之號者先師自 花山院右府公所賜
也於是友人萩原元克刻石以誌
歌歡暢雅居士
將來尙文字ノ磨滅セサル様保存セントス

十王堂

山門左土塀ノ部ニ堂アリ格子ニシテ中ニ十王像アリタレトモ今ハ鐘堂
内ニアリ

藥師堂

本村二十六戸ト稱セシ時ヨリ存在セリト云フ年代明カナラス三十三
年毎ニ開帳ヲ爲セリ本村ノ草分ケナリト云フ
稱名院本堂内ニアリ以前ハ寶珠庵ノ西ニアリタリ

寶珠庵

御岳權現ノ西ニアリタリト云フ今ハナシ臨濟宗寺院ナランカ附近ニ墓
所アリタルヲ以テ見レハ相當ノ檀家ヲ有セシナラン今ハ無シ記録ノ徴
スベキモノモ有セス唯閑窓夜話集ノ著者釋天柱老師鹽山ノ寺院ヨリ來
リテ孤獨隱捷詩歌ヲ誦シ村内青年ニ讀書講義點茶插花ヲ教ヘ樂ミタリ
故ニ老僧疾病ノ際青年ハ交代看護ヲナシタリト云フ後老死ノ際ハ鹽山
ニ厚ク葬リシト云フ僧至テ淡恬ニシテ風韻ニ富ミ天下ノ學者ヲ友トシ
タリ閑窓夜話集ニ大沼枕山序セルヲ以テ其一班ヲ知ルニ足ル本村富豪

初鹿野操氏又交誼アリテ同書ニ跋ヲ記セリ病餘示人ノ律句ハ老僧ノ一生ヲ窺フニ足ル老僧ニ命名セラレタル者今猶生存悉ク七十歳前後ナリ語ル處ニ曰ク僧ハ普通ノ身長ニシテ中肉禿頭毎年歳暮ニハ自身命名セシ幼年兒女ニ天保錢ヲ吳レタリト其禿頭ニシテ夏季蠅ノ頭ニ留マルヲ違ヒ緞布ヲ以テ無造作ノ頭巾ヲ作り冠リ居レリト頭巾ノ兩角尖リ格好滑稽ニシテ今モ眼前ニ髣髴タリト村内兒童ノ門前ニ嬉戲スルモ決シテ叱リシコトナク時々菓子ヲ分與シテ惡戯ヲナサハルコトヲ説諭セリト本村ニ隱捷セシヨリ「ギョクトヲケン」下稱セリト云フ按スルニ寶珠ニ對シテ玉ト稱シ僧侶ナルヲ以テ董ト云ヒ玉董軒ト書セシカ誰モ知ル者ナシ七十二歳ニシテ死亡セリト云フト雖モ死亡年代明カナラス想像スルニ安政年間ナラン夜話集ノ起版ハ萬延元年ニシテ天柱著トアレトモ實ハ初鹿野氏ノ手ニ成レルモノナリ一讀スレハ明カナリ又弘化嘉永年代ニ出生シ現在生存セル古老ニシテ老師ニ命名セラレタル者アルヲ以テ見レハ其死ハ安政年代ナラン死後子弟初鹿野市右衛門小野傳一郎兩氏

出金ノ上石ニ僧侶袈裟ヲ着シ手ニ釋杖ヲ曳キシ圖ヲ刻ミ樹立セリ共葬墓地ニ移轉セシモ水害ニテ流失ス夜話集ハ多クハ寶珠庵ニ在リテ作製セシモノナレトモ内本村ノ名稱ニ關係アルモノヲ一二轉載スレハ

田中八勝寶珠秋月

緒言中ニ記セリ

稱名精舍

六時長坐無量臺

口誦佛名頻一開

况聽洪鐘聲百八

春眠破曉洗心埃

詠瑞松贈初鹿野生時臘雪盈尺句中故及

瑞雪漫々白滿阡

松青萬里別山川

幽齊欲結禪林夢

自喜吾家別有天

阿孃墓或ハおむつ塚

一町田中在村北小澤(甲斐國志十卷ノ三十九古蹟部第二山梨郡栗原筋)阿嬢ハ本村ノ領主關金平正之ノ妻ナリ正之其不義アルヲ疑ヒ之ヲ嚴責ス阿嬢其毒楚ニ絶ヘス終ニ自經ス因テ此ニ埋ム今ニ微風細雨蕭滌タル夜ニハ或ハ陰火炎々タルヲ見ルト云(村記ニ云金平ハ慶長五年ヨリ本村ニ住シ三百石ヲ領ス其後元和元年大阪ノ役ニ戰死スト無名氏ノ詩アリ

青娥皎齒暴人前

宛轉何違奉所天

身死冤魂消不得

至今陰火繞桑田

關金平ノ宅迹全村今田安殿ノ官廳ヲ置カル、所乃チ之ナリト云)

口碑ニ云地頭專横窮リナクおむつナル者本村某ニ嫁スルノ際強テ地頭ノ權威ニヨリテ意ニ從ハシメントセルモ應セス爲メニ土中ニ穴ヲ作りテおむつヲ入レ尙虫攻ニセルモ從ハスシテ苦悶死ニ至レリトおむつノ母粟ヲ手ニ掴ミ來リ怨言シテ曰ク之粟ノ數程代々地頭ヲ惱マセヨト爾來怪火墓邊ニ燃ヘ冤靈來テ地頭ヲ惱スコト數代遂ニ同族ヲシテ滅亡セシメタリト

志やぶき婆さん

梨之木南割千二百五十一番地隅ニアリ咳嗽ニ惱ム者之ニ詣スレハ治スルト稱シ線香常ニ絶ヘサリキ明治四十年水害ニ流失ノ厄ニ遇ヒ現今稱名院門前ニ其印ヲ樹テリ

仕置場

山ノ神百八十番地先ニアリタリ明治四十年水害ニヨリ流失セリ之ノ所ハ輕罪ニヨルモノヲ處刑シタル上放還セル所ニシテ重罪犯ニヨル仕置場ハ上河原歌田境ノ河原ナリシト云フ

胞衣埋葬場

宮ノ腰二百四十九番地内ニアリタリ明治四十年水害後一町田中共葬墓地ニ移轉セリ

一町田中共葬墓地

明治十三年新設ス以前ハ稱名院地内ニ埋葬セルモ人口増殖ト共ニ衛生上河水井水及土地ノ汚染ヲ虞リ現在ノ地ニ移轉セリ地内ニ一石碑アリ

墓 碣

居士諱宣歙稱養助一町田中人姓飯島氏後有故三井氏事母孝謹嘗爲一縣吏以母老不欲遠遊歸居常以誨童以書札又兼授句讀爲業頗爲人所故愛安政己未十月二十八日病歿享年五十葬于邑稱名院精譽求願養進居士其法諡也沒後邑人思之不已相聚議欲勒之石以圖不朽請銘墓於余雖未悉居士生平也然以邑人謀之厚思久至如此者觀也則豈有此行誼能信於邑里歟因不辭而爲之銘 銘曰

酒釀馨香享祀無溢嗟呼庶乎古之遺愛

萬延庚申夏六月

強哉古屋稿撰並書

裏面 男百〇七名 女四十五名ノ氏名ナリ

本村維新前寺子屋ニ於テ用ヒシ書籍大要左ノ如シ

國 盡 名 頭 字 是非短歌

甲府町名盡 苗 字 盡 水戸黃門 光國郷御壁書

松 島 詣 富 士 日 記 要 字 往 來

道 具 盡 消 息 往 來 童 蒙 訓

本 朝 大 略 五 節 句 往 來 田 中 往 來

甲 州 往 來 甲 州 廻 り 甲 府 廻 り

江 戶 路 往 來 身 延 詣 諸 禮 略 式

吾 妻 下 向 往 來 紀 の 路 廻 十 二 月 往 來

石 山 文 章 四 季 の 文 章 請 狀 の 事

佳 節 往 來 商 賣 往 來 初 登 山 手 習 教 訓 書

實 語 教 世 話 字 往 來 詠 歌 大 概

龍 田 詣 源 氏 長 歌 源 氏 短 歌

洛陽文章

梅若詣

八四

女今川帖

介婦遺言

近江八景往來

修息心法

甲斐三郡村名盡

烏丸殿御教書

田中往來

萩原(加賀美)元四郎著

甲斐四郡村名盡

江戸路往來

全人

十著

田中揭示場

田中揭示場ハ郵便局東道路ト甲州街道接續部ノ東ノ角ニアリ

筭堀

筭堀ハ現郵便局東ヲ流ル、堰ニシテ筭ノ如ク細長キ溝ナリ其名ノ來リシ理由ヲ知ラス小松里道ニ沿ヘル中村東吉氏前ノ堰ヲモ稱セリ

尊薺堀

尊薺堀ハ行者塚ニ接シ尊薺叢生セリト云フ

山道

山道ハ中學校運動場西北邊ノ耕地道路ナリ筐子入會へ通スル故ニ之名アリ

堀拔井

堀拔井ハ古來ヨリ試鑿セル者多カリシモ成效セス

井水

本村ハ地下六尺ヨリ九尺ノ間ヲ以テ最上トス之ヨリ深キハ悉ク悪水ナリ

書家

藤省庵 初鹿野新左衛門氏一門ナリ

渡邊傳吉 御家流能書ナリキ

畫家

三好如圭 飯島五郎左衛門氏一族ナリ

蹴鞠

小野七郎右衛門氏一族ニシテ二代目ノ人及萩原元克弟某免許ヲ有セリト云フ

川柳狂句合

明治ノ初年ヨリ本村ニ流行セリ

素遊	樂調	壽樂	鹿鳴	雨石
文橋	三ツ輪	水玉	柳志	臺
氏己ニ故人ニ屬スト雖モ現在尙				
花宴	靜	綠	骨皮	和之

甲子 龍池

等ノ諸氏アリテ盛ナリ

傳説

當村氏神ハ武勇ヲ守護ナサシメ玉フニヨリ戰場ニ於テ負傷又ハ戰死セシ者ナシト言傳フ

産婦ヲ守ラセ玉フニヨリ嘗テ難産ノアリシコトナシト云フ

又言フ火事ヲ守護ナサシメ玉フニヨリ古來ヨリ失火ノ憂ナシト

鍛冶ヲ嫌ハセ玉フニヨリ鍛冶職ニテ成効セシ者ナシト之ハ神社記中ニ

神体ヲ韃ニカケテ云々ヨリシテ火事及鍛冶ノ傳説ヲ來セシカ

馬ヲ嫌ハセ玉フニヨリ馬ヲ飼育シテ成効セシ者ナシト云フ

附記

田中のはあり

春日釣魚

こゝかしこつりする人の見ゆるる暇

春の小川みうきををちりして

日川橋納涼

夕まくれ人のつとへる日川橋

わさる風さへ涼しありたり

堤塘秋月

花すゝき穂よててまねく川つゝみ

くまなく照らぬ月のさやけさ

下河原鴛鴦

鴛鴦のをりく來きく下河原

うきねの夢やたのしかるらん

日川中學

日の川やまなひのそのゝ小松原

棟とあるのいくらあるらん

陣屋稻荷

この神のくしき幸ひかやつゝ穂の

田中のさとの豊けありたり

蕉園生祠

りま人のさあきいさを、生祠

萬代あけてあふくのしこさ

元克手蹟

水莖のあとをとどめてまれ人の

いさをくちせぬ石文をこれ

終

東洋文庫

山梨県立中央図書館

大正九年十二月十八日印刷 (二町田中拾遺集) 附圖參枚
大正九年十二月二十二日發行 (非賣品)

山梨縣東山梨郡日川村青年團一町田中支部
著作者 附屬圖書館 萩原文庫

代表者 三井清

全 發行者 三井清

山梨縣東山梨郡日川村
印刷者 長野甲斐造

186
703

元 寧 手 順 本 具 裡 甲 斐 登

山 東 縣 東 山 梁 港 日 川 林

全 部

全

介 夾 本 三 我 部

山 東 縣 東 山 梁 港 日 川 林 人 海 香 瓦

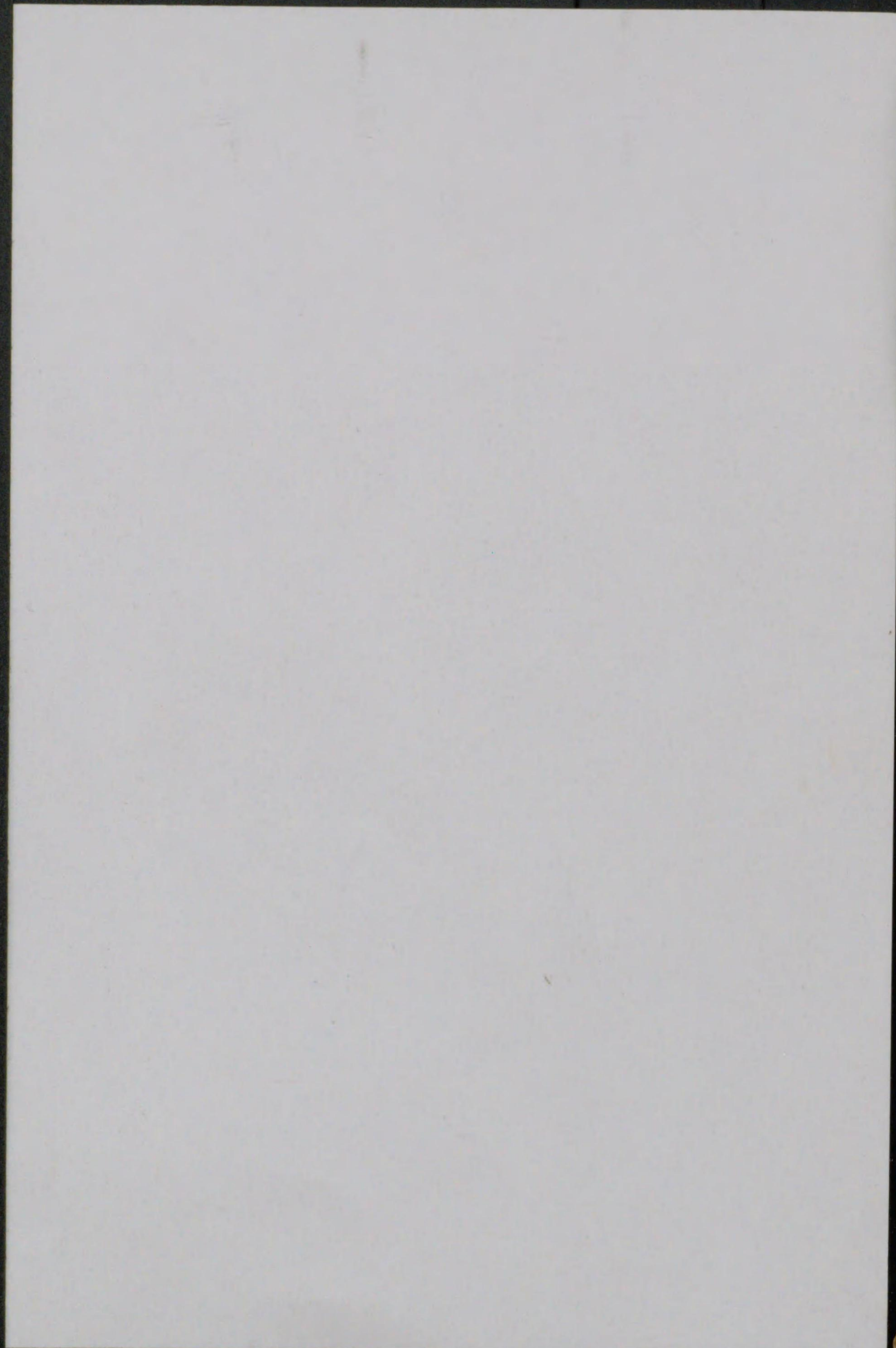
香 明 香 順 順 香 順 森 取 文 順

山 東 縣 東 山 梁 港 日 川 林 人 海 香 瓦

大 正 十 二 年 十 二 月 二 十 二 日 發 行

大 正 十 二 年 十 二 月 十 八 日 明 照 二 四 田 中 待 重 達 備 關 總 對

表 賣 品



帝

圖

書

韻

類

韻